

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第13集

とうぜんじ くろやま
東禅寺・黒山遺跡Ⅳ

—平成10年度南若川一般河川改修・2級工事に伴う発掘調査報告—

1999

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター



遺跡上空より北方を望む

序

本書は、山口県山口土木建築事務所の委託を受けて、財団法人山口県教育財団が実施した南若川一般河川改修・2級工事に伴う東禅寺・黒山遺跡4年次の発掘調査記録です。

私たちにとって先人が残した文化財は、ふるさとの歴史を理解する上で、大変貴重な財産です。この文化や伝統を継承することは、21世紀に向けて活力と潤いに満ちた創造をするために欠くことのできないものです。これらの文化財を損なうことなく未来へ伝えていくことは、今、私たちに与えられた課題であると言えます。

遺跡の保護については、埋蔵文化財保護の立場から基本的には現状保存が望ましいものでありますが、やむを得ず消失することになった地域については、発掘調査を実施し、記録保存を行うこととしております。

このたびも、南若川一般河川改修・2級工事に先立ち関係諸機関と協議・調整を重ねて参りましたが、当工事によって失われる範囲について発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、平安時代から中世にかけての集落跡が発見されました。なかでも、平安時代の掘立柱建物跡が多数検出され、当時の人々のくらしを考える上できわめて貴重な資料になりました。また、4年間の調査で最も大型の掘立柱建物の発見は、近くの周防鑄銭司跡との関連も考えられ、注目されるものです。これらの資料は貴重で、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書はその調査成果をまとめたものであり、収録された資料が、教育・学術・文化の振興のために広く活用されることを願っています。

平成11年3月

財団法人山口県教育財団
理事長 牛見 正彦

例 言

- 1 本書は、財団法人山口県教育財団が、平成10年度に実施した東禅寺・黒山遺跡（山口県山口市大字鑄銭司字大円）の発掘調査概要報告書である。
- 2 調査は、財団法人山口県教育財団が山口県山口土木建築事務所の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次の通りである。
調査主体 財団法人山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
調査担当 財団法人山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター指導主事 大野 真司
同 伊藤 幸浩
- 4 出土遺物のうち、石製品の石材鑑定については、山口県立山口博物館専門学芸員 亀谷 敦氏からご教示を得た。なお石材鑑定は表面観察によるものである。
- 5 調査にあたっては、山口県山口土木建築事務所、山口市教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 6 調査及び本書の作成にあたっては、山口県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得た。
- 7 本書の第1図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図「小郡」・「台道」を使用した。第2図は、山口県山口土木建築事務所提供のものである。
- 8 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 9 本書に使用した土色の色調の表記はMunsell方式による。
（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 『新版標準土色帖』参照）
- 10 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 11 土器実測図の断面は、白抜きが土師器・瓦質土器・陶磁器、黒塗りが須恵器を表す。また、内外面の網掛けは黒色土器を表す。
- 12 遺構実測図の断面は、斜線が石で黒塗りが土器を表す。
- 13 本書で使用した遺構略号は次の通りである。
SB：建物跡 SK：土坑 SP：柱穴状小ピット SD：溝・溝状遺構 SX：用途不明遺構
- 14 本書に掲載した実測図・写真の作成及び本書の執筆・編集は、大野・伊藤が共同で行った。

本文目次

1	遺跡の位置と環境	1
2	調査の経緯と概要	3
	(1) 調査に至る経緯	3
	(2) 調査の経過と概要	3
3	VI地区の遺構と遺物	5
	(1) 掘立柱建物跡	6
	(2) 土坑	14
	(3) 柱穴状小ピット	17
	(4) その他	19
	① 用途不明遺構	19
	② 表面採集	20
4	VII地区の遺構と遺物	21
	(1) 掘立柱建物跡	22
	(2) 土坑	24
	(3) 柱穴状小ピット	26
	(4) 溝・溝状遺構	27
5	まとめ	28

図 版 目 次

図版 1	調査区遠景（陶ヶ岳から）	遺跡全景（遺跡上空から）
図版 2	VI地区SB出土遺物	VI地区SK出土遺物
図版 3	VI地区SK出土遺物	VI地区SP出土遺物
図版 4	VI地区SP出土遺物	VI地区SX1出土遺物
図版 5	VI地区SX1出土遺物	VI地区表面採集遺物
図版 6	VII地区SB出土遺物	VII地区SK出土遺物
図版 7	VII地区SP出土遺物	

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第24図	SK1出土遺物実測図	14
第2図	調査区設定図	2	第25図	SK3実測図	15
	VI地区		第26図	SK3出土遺物実測図	15
第3図	VI地区遺構配置図	5	第27図	SK4実測図	15
第4図	SB4実測図	6	第28図	SK4出土遺物実測図	16
第5図	SB4出土遺物実測図	6	第29図	SK5実測図	16
第6図	SB15実測図	6	第30図	SK5出土遺物実測図	16
第7図	SB10実測図	7	第31図	SP出土遺物実測図	18
第8図	SB10出土遺物実測図	7	第32図	SX1出土遺物実測図(1)	19
第9図	SB13実測図	8	第33図	SX1出土遺物実測図(2)	20
第10図	SB13出土遺物実測図	8	第34図	表面採集遺物実測図	20
第11図	SB14実測図	8		VII地区	
第12図	SB14出土遺物実測図	9	第35図	VII地区遺構配置図	21
第13図	SB16実測図	9	第36図	SB1実測図	22
第14図	SB16出土遺物実測図	9	第37図	柱穴遺物出土状況実測図	23
第15図	SB3実測図	10	第38図	SB1出土遺物実測図	23
第16図	柱穴遺物出土状況実測図	10	第39図	SK3実測図	24
第17図	SB3出土遺物実測図	10	第40図	SK3出土遺物実測図(1)	25
第18図	SB6出土遺物実測図	10	第41図	SK3出土遺物実測図(2)	26
第19図	SB6実測図	11	第42図	SP出土遺物実測図	27
第20図	SB8実測図	11		まとめ	
第21図	SB7実測図	12	第43図	重複した建物配置図	28
第22図	SB7出土遺物実測図	12	第44図	東禅寺・黒山遺跡I~IV主要遺構配置図	31・32
第23図	SK1実測図	14			

表 目 次

第1表	VI地区掘立柱建物一覧表	13	第4表	VII地区土坑一覧表	26
第2表	VI地区土坑一覧表	17	第5表	建物規模一覧表（平安時代）	28
第3表	VII地区掘立柱建物一覧表	24			

付 図 目 次

付図 1	VI地区遺構配置図		付図 2	VII地区遺構配置図	
------	-----------	--	------	------------	--

1 遺跡の位置と環境

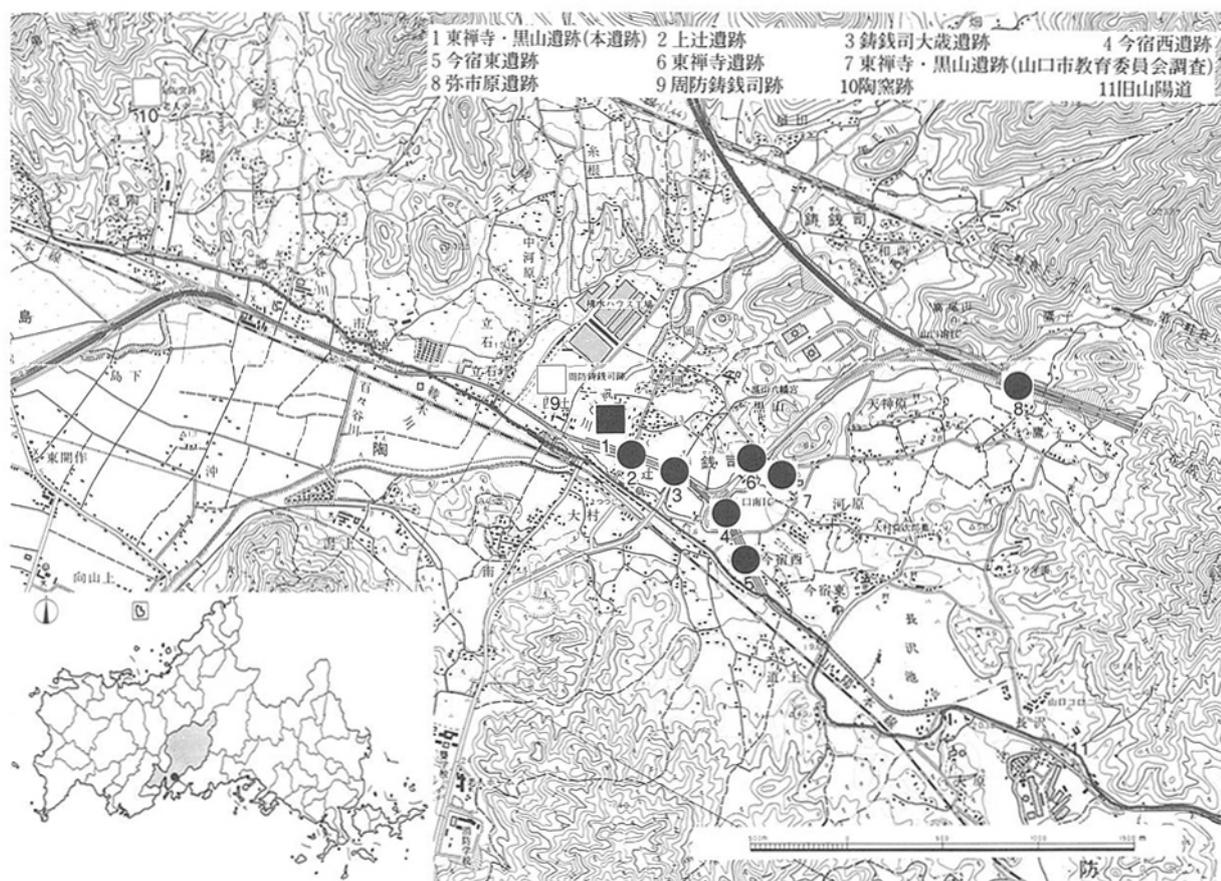
東禅寺・黒山遺跡は、山口市の中心部から南へ約11kmの山口市大字鑄銭司地内に所在する。遺跡の南には、国道2号・山陽本線が走り、北部山麓を山陽新幹線・山陽自動車道が東西に貫いている。現在は、国道2号（四辻バイパス）の高架化事業が急ピッチで進められている。郊外の典型的な農村地帯も、交通網の整備にあわせ、工業団地や住宅団地が立地するなど開発が進んでいる。

鑄銭司地区は、北は標高300～400mの山口山地、南は秋穂山地、東は谷中分水帯を境に大道地区に接する。西側を除く三方を山地に囲まれた低地で、山口山地から流れ込む金毛・高橋川が、遺跡南部で合流し南若川となり山口湾に流入する。金毛川の洪積段丘や沖積段丘にあたる高度8 m前後の低い段丘面に遺跡は立地する。

年間を通じて温暖小雨の瀬戸内気候区で、しかも小河川が多いため、灌漑用人口池が遺跡の上流部に多く立地しているのもこの地域の特色である。

本年度の調査区は、金毛川に向かって傾斜した丘陵の端に位置している。遺跡周辺の低地には水田が広がり、県道に沿うように丘陵上に集落が発達している。小河川が合流する低地で、現在でも水害へ対処するため河川改修・緑化事業が進められている。

東禅寺・黒山遺跡は、古代から中世を中心とした集落跡である。古代、鑄銭司地区は、吉敷郡「八千郷」とよばれ山陽道の宿駅として栄えた。山陽道は、現在の国道2号あたりに位置し、遺跡の南側「大村」（四辻）付近に官駅である「八千駅」が置かれていた。中世には、大内氏の城下町山口の外港秋穂港へと通じる秋穂街道と山陽道がこの地「四辻」で交差した。秋穂道は、上使道とも呼ばれ当時



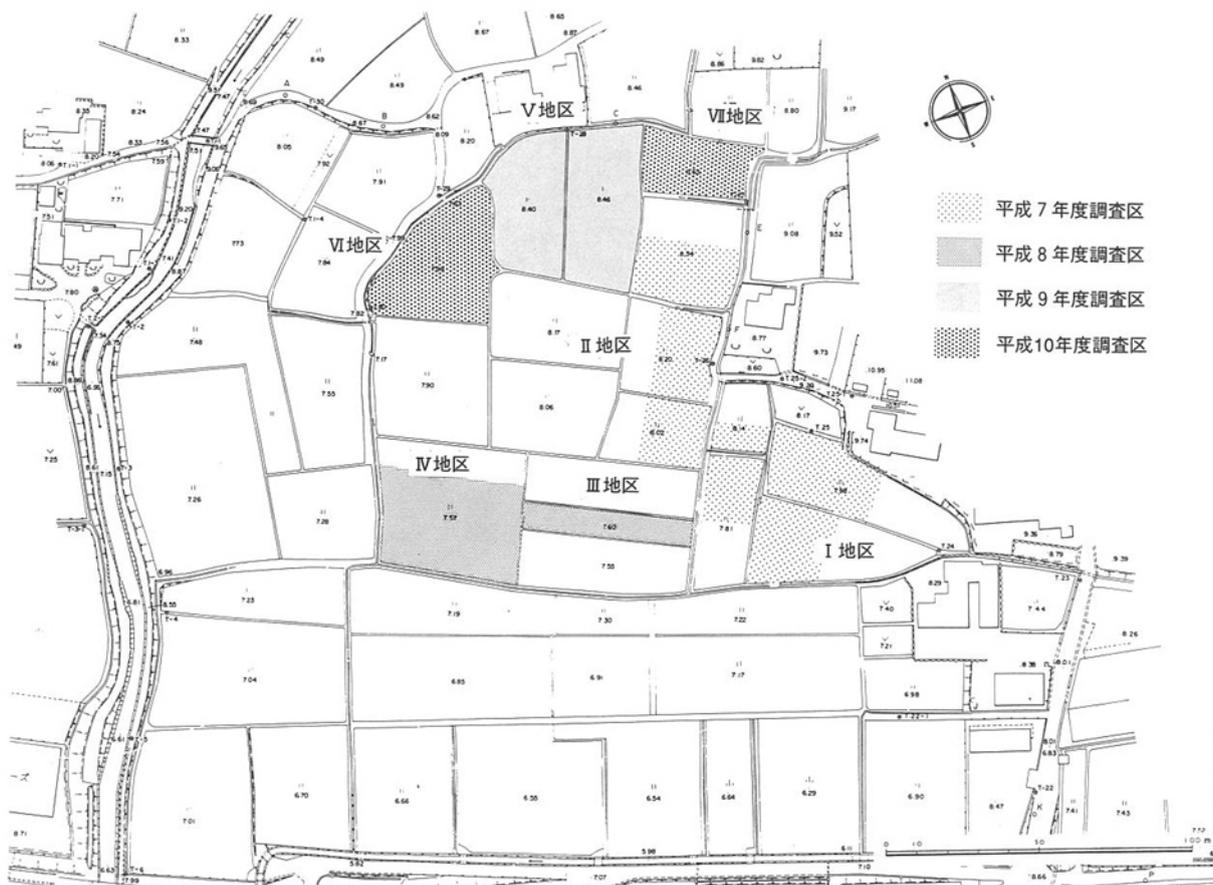
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

の幹線道路である。遣明使節や勘合船の出入りした大内氏の海外貿易港の「深溝」も近くに位置しており、中世においても水陸交通の要衝であった。近世には、遺跡一帯は水田と化し、集落は台地や段丘上位面及び山陽道沿線に移る。また、南西部では干拓が進められ、現在に至る。

本遺跡の西側には、国指定史跡周防鑄銭司跡、陶窯跡がある。陶窯跡は、奈良時代から平安中期にかけて須恵器の窯があったところで、陶地方の丘陵地南側斜面に半地下式登り窯が残っている。周防鑄銭司跡は、平安時代（9世紀初めから11世紀初頭）に皇朝十二銭を鑄造した官営工房跡である。平安時代の一時期には、陶・鑄銭司地域は、古代の臨海工業的集落が展開されていたと考えられる。第3次までの本遺跡発掘調査で、近接する「鑄銭司跡」との関係をかかわせる「緑釉陶器」「三叉トチン」「埴塙」「羽口」などの遺物も出土している。東禅寺・黒山遺跡の集落を性格づけるものの一つである。

近年、本遺跡の周辺では遺跡の発掘調査が進められ、鑄銭司地区の遺構の広がりが明らかになりつつある。本遺跡の南側に位置する「上辻・鑄銭司大歳・今宿西遺跡」「今宿東遺跡」では、中世を中心とした集落遺構が確認されている。鑄銭司地区の集落は、平安から室町へと時代が下がるに連れて西から東へ、低地から微高地へと移動し、急速に耕地拡大が計られる近世初頭に急速に衰退することが明らかとなっている。また、「弥市原・東禅寺遺跡」等の発掘によって、中世の集落が山麓の緩傾斜地や微高地にも営まれていたことが確認されている。本年度、本遺跡の南東約1kmの山口南インターチェンジ側で山口県教育委員会が行った発掘調査でも、同様の性格を持つ室町時代の集落跡が確認されている。本遺跡についても、鑄銭司地区全体の集落の広がり、時代の変遷の中でとらえていくことが必要であろう。

参考文献 山口県教育委員会「弥市原・東禅寺」1982 山口県教育委員会「上辻・鑄銭司大歳・今宿西」1984
山口県教育委員会「今宿東遺跡」1986



第2図 調査区設定図

2 調査の経緯と概要

(1) 調査に至る経緯

東禅寺・黒山遺跡の位置する鑄銭司地区は、北から金毛川、東から高橋川が流れてきて、南若川に合流する地点にある。この地域では、地形的に灌水状態が発生しやすいため、水田の冠水、床下、床上浸水などの水害に見舞われてきた。そこで、県はこの水害の対処のため、調整池を建設する南若川一般河川改修・2級工事事業を計画した。

鑄銭司地区には、国指定史跡「周防鑄銭司跡」を始め、多くの遺跡が確認されており、調整池建設予定区域にも遺跡の埋存する可能性が高いと推測された。そこで、山口県山口土木建築事務所から調査依頼を受けた山口県教育委員会は、平成6年に計画地区内の試掘調査を行った。その結果、土坑や柱穴などの遺構や、土師器・磁器などの遺物が検出されたため、事前の発掘調査を実施することとなった。対象面積が18,000㎡と広大なため、継続調査とし、財団法人山口県教育財団が山口県山口土木建築事務所から受託し実施することとなった。

(2) 調査の経過と概要

調査初年である平成7年度は、工事区域北東部を調査対象地とし、発掘調査を実施した。調査面積は約3,500㎡で、平安時代から近世にかけての集落跡が確認された。8年度は、工事区域の中央部、面積約2,000㎡を発掘調査し、平安時代から中世にかけての集落跡が確認された。三年次にあたる9年度は、工事区域西北部約2,200㎡を発掘調査し、平安時代から室町時代にかけての集落跡を確認した。

本年度は、工事区域北部約2,100㎡を調査対象とし、調査区は昨年度調査区をはさみ西側をⅥ地区、東側をⅦ地区とし調査を実施した。

平成10年4月28日、現地において、私道関係者や地権者等関係諸機関との打ち合わせを行い、調査地域および調査上注意すること等について確認をした。

6月5日より、本格的な発掘調査を実施した。まず、地層と遺構の分布を把握するために、トレンチを設定し、人力によって掘り下げた。その結果、基本的層序は耕土－盤土－遺構面であることと、遺構面の土色及び遺構の分布状況を確認することができた。

6月12日から、重機によって表土除去を開始した。今年も雨のため、調査区が水に浸かり作業はなかなか捗らなかった。

今年、調査区が2地区に分かれ離れているため、遺構が少ないⅦ地区から作業を進めることにした。

7月6日からⅦ地区、7月10日からⅥ地区の遺構検出作業を行い、座標杭を設置した。その後、調査区全域の平板測量を行い、遺構配置図を作成、次からの遺構掘り込みに備えた。

7月31日から、Ⅶ地区の掘り込みを開始した。



重機による表土除去

調査区東側より掘り始めた。北東隅の包含層からは杭列がでたり、土坑からは遺物や粘土塊などが出土したので、随時写真・図面等の記録をとりながら調査を行った。

8月19日からⅦ地区のグリッド実測を始め、8月24日に終了した。

8月25日に山口市立瀧上中学校生徒15名の体験学習を実施した。Ⅵ地区南西部包含層の掘り込みを体験してもらった。土師器片や緑釉陶器片などを実際に見てもらうことができた。

8月26日から、Ⅵ地区の掘り込みを開始した。大きな土坑や溝など時間を要する遺構が少なかったため作業は順調に進んだ。

9月3日、個別の図面をとりながら、Ⅵ地区のグリッド実測を始めた。

9月11日、空中写真撮影を行った。調査区全景、地区別などの撮影を行った。

9月18日から、掘立柱建物の写真撮影と個別図面作成を同時進行していった。個別図面が終わり次第残りのグリッド実測を行っていき、10月2日に実測を終了した。

10月3日、現地説明会を実施した。地元の中学生をはじめ熱心な見学者を迎え、発掘調査の成果を見てもらった。

10月19日、山口土木建築事務所担当者の現地立会を経て、現地調査をすべて終了した。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて調査資料を整理し、出土遺物の復元・実測を実施して、この報告書を作成した。



遺構検出作業



瀧上中学校体験学習



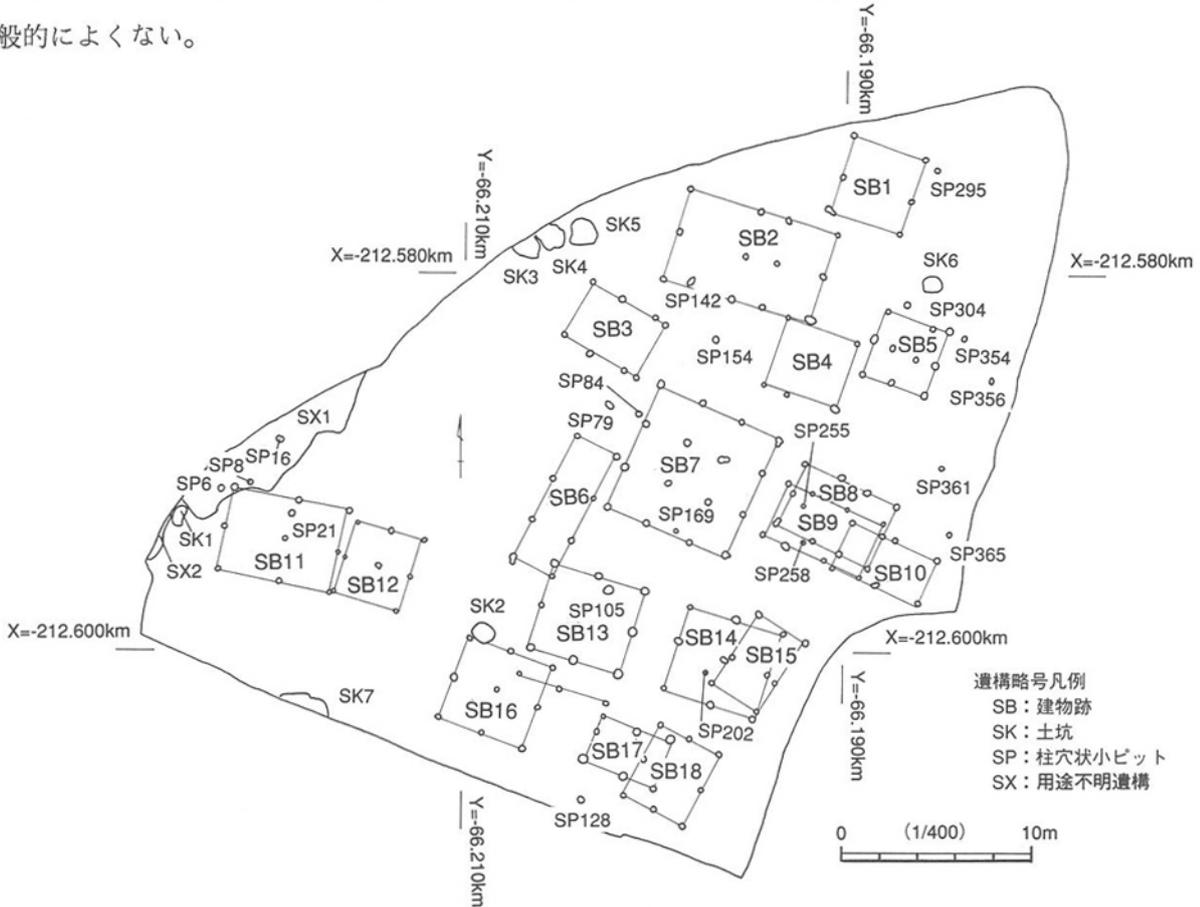
空中写真撮影



現地説明会

3 VI地区の遺構と遺物

今回の発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡18棟、土坑 7基、柱穴状小ピット約950個の他用途不明遺構が2基ある。遺構は調査区全域に広がっているが、掘立柱建物跡は調査区中央から東側に多く検出された。なお、各遺構の上面は、後世の水田開発により削平を受けており、遺存状況は全般的によくはない。



第3図 VI地区遺構配置図



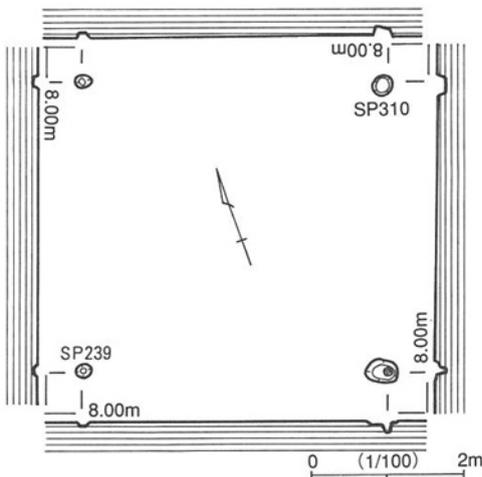
VI地区全景（上空から）

(1) 掘立柱建物跡

調査区内に多数の柱穴が検出され、その中から掘立柱建物跡が18棟復元できた（第3図・第1表）。他にも掘立柱建物として復元される可能性があるものもあるが、確実に柱穴が並ぶものを取り上げた。規模別にみると、2間×2間のものが6棟でもっとも多く、続いて2間×1間、3間×1間の順になっている。

SB4

SB4は、調査区北東部に位置し、1間×1間の建物である。しかし、規模のわりに面積は15.2㎡と広い。棟方向は、N70°W、桁行長4.0m、梁行長3.8m。柱穴の規模は、直径14~28cm、深さ4~15cm。SP239・SP310から、土師器片が出土。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のもものと推定される。



第4図 SB4実測図



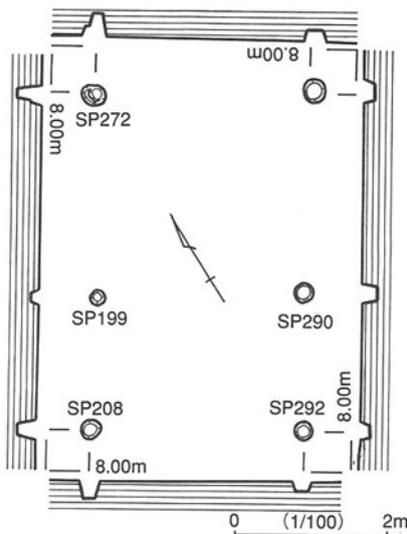
SB4 全景（南西から）

1はSP310から出土した土師器碗の底部で、低い高台をもつ。色調は、内側が灰白色（2.5Y 8/2）、外側は淡黄色（2.5Y 8/3）で、焼成はやや軟質である。

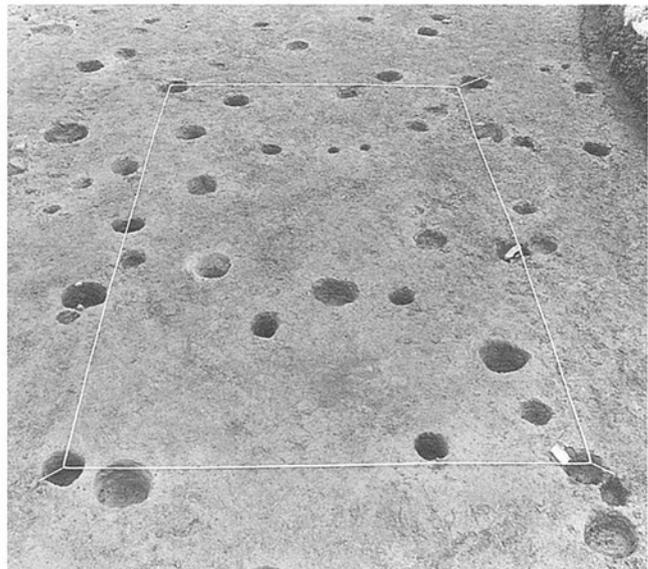


第5図 SB4出土遺物実測図

SB15



第6図 SB15実測図

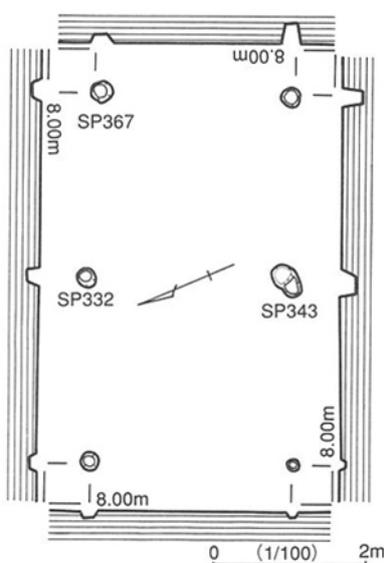


SB15 全景（南西から）

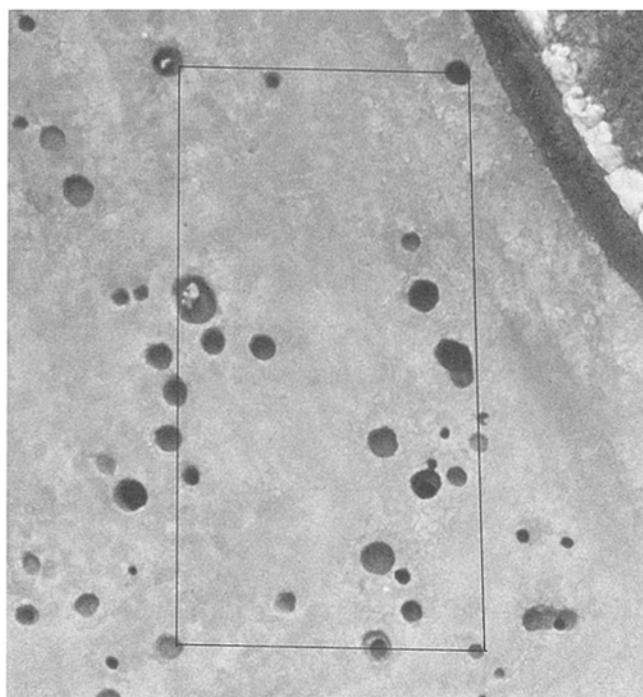
SB15は、調査区南東部に位置し、2間×1間の建物である。棟方向は、N34° E、桁行長4.46m、梁行長2.8m。柱間の平均は桁行方向2.23m、梁行方向2.8m。柱穴の規模は、直径24～30cm、深さ14～32cm。SP199・208・292からは土師器片が出土。SP272からは、土師器片と須恵器片が出土。SP290からは、緑釉陶器片が出土した。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のものと推定される。

SB10

SB10は調査区東側に位置し、2間×1間の建物である。棟方向は、N66° W、桁行長4.9m、梁行長2.6m。柱間の平均は、桁行方向2.45m、梁行方向2.6m。柱穴の規模は、直径14～36cm、深さ8～28cm。SP332からは、土師器皿が出土。SP343からは、土師器片と須恵器片が出土。SP367からは、土師器坏が出土した。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のものと推定される。

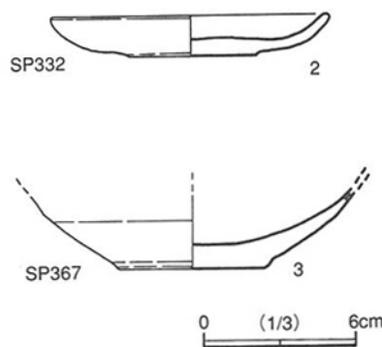


第7図 SB10実測図



SB10 全景（上空から）

2はSP332の出土遺物で土師器皿。体部は回転ナデで、底部に回転糸切り痕と板目痕が見られる。3はSP367の出土遺物で土師器坏。体部は内弯して立ち上がっており、内面は器面剥落のため調整不明、外面には回転ナデの跡が見られる。

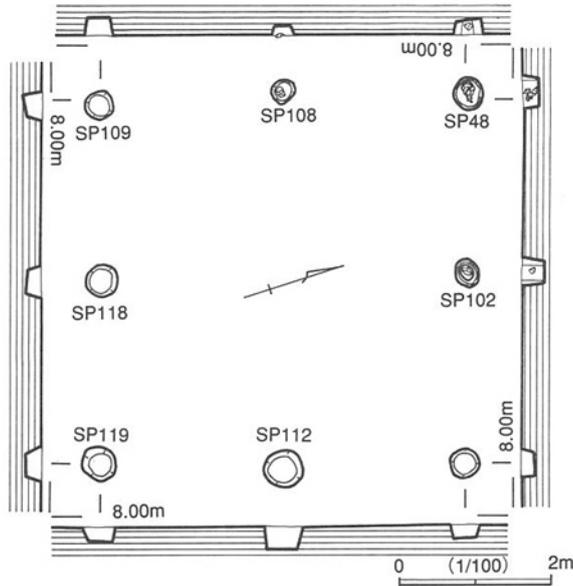


第8図 SB10出土遺物実測図

SB13

SB13は調査区中央部南側に位置し、2間×2間の建物である。棟方向は、N74° W、桁行長4.8m、梁行長4.74m。柱間の平均は桁行方向2.4m、梁行方向2.37m。柱穴の規模は、直径28～48cm、深さ12～31cm。SP48からは土師器坏が出土。SP102からは、土師器片、須恵器片

と白磁碗が出土。SP108・109・118・119からは、土師器片が出土。SP112からは、土師器甕、須恵器片及び緑釉陶器片が出土。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のものと推定される。

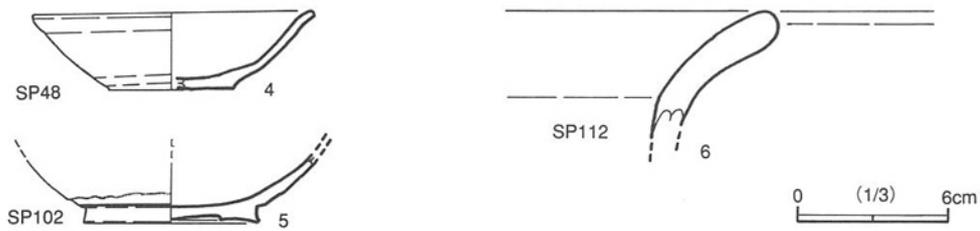


第9図 SB13実測図



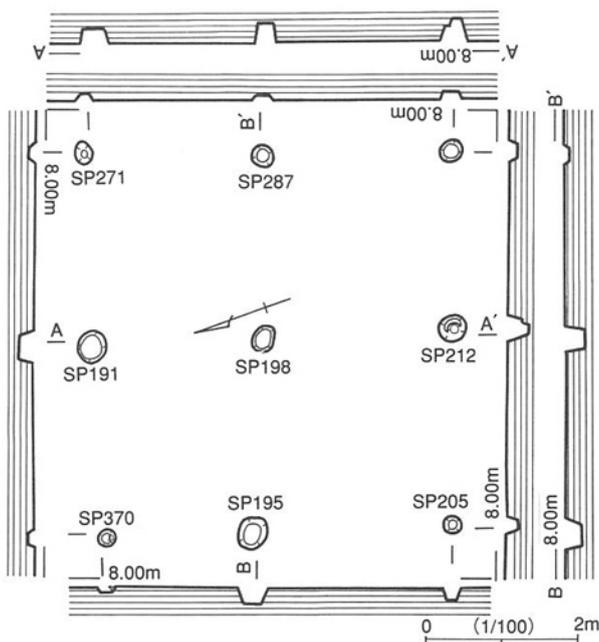
SB13全景(南東から)

4はSP48の出土遺物で土師器坏。体部は内弯して立ち上がり、口縁部が少し外に開く。底部には糸切り痕が見られる。5はSP102の出土遺物で白磁碗。底部は蛇の目高台になっている。6はSP112の出土遺物で土師器甕。内面にはヘラケズリ、外面にはハケ目の調整が見られる。



第10図 SB13出土遺物実測図

SB14



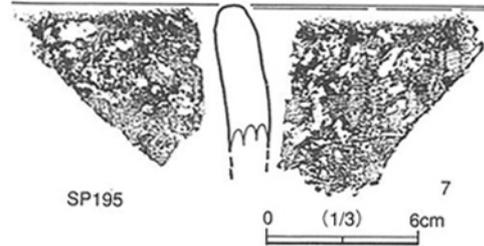
第11図 SB14実測図



SB14全景(北西から)

S B 1 4 は、調査区南東部側に位置し、2間×2間の建物である。棟方向は、N70° W、桁行長5.0m、梁行長4.6m。柱間の平均は桁行方向2.5m、梁行方向2.3m。柱穴の規模は、直径20～40cm、深さ6～28cm。S P 191・198・205・212・271・287からは、土師器片が出土。S P 195からは土師器片と石鍋片が出土。S P 370からは、緑釉陶器片が出土。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のもものと推定される。

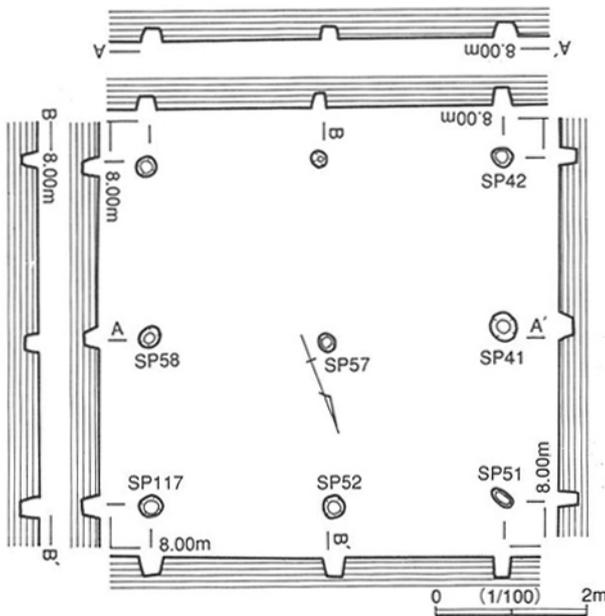
7はS P 195の出土遺物で石鍋。材質は滑石で、気泡が多い。石鍋の特徴である突帯がなく、素朴な口縁をしている。外側にケズリ跡が多数見られる。色調は内外ともに褐灰色(10YR 4/1)である。



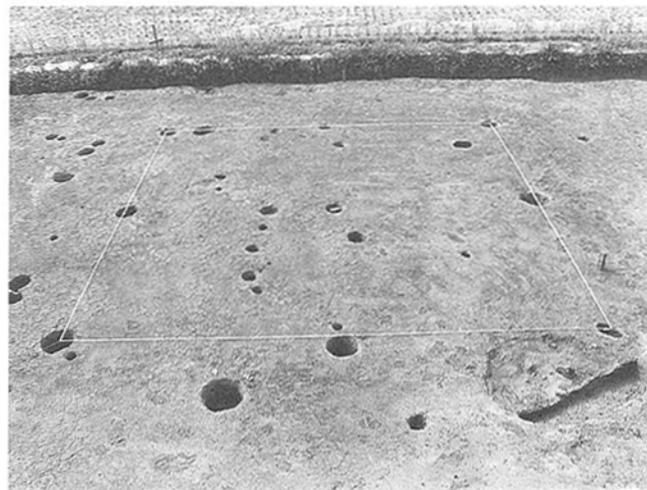
第12図 S B 1 4 出土遺物実測図

S B 1 6

S B 1 6 は、調査区南側に位置し、2間×2間の建物である。棟方向は、N69° W、桁行長4.6m、梁行長4.32m。柱間の平均は桁行方向2.3m、梁行方向2.16m。柱穴の規模は、直径16～34cm、深さ18～26cm。S P 41・42・58・117からは、土師器片が出土。S P 51・52からは、土師器片と須恵器片が出土。S P 57からは、土師器皿が出土。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のもものと推定される。

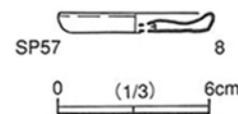


第13図 S B 1 6 実測図



S B 1 6 全景(北東から)

8はS P 57の出土遺物で土師器皿。底部には回転糸切り痕が見られる。内外面ともに回転ナデのような調整が見られるが、器面剥落のためはっきりしない。

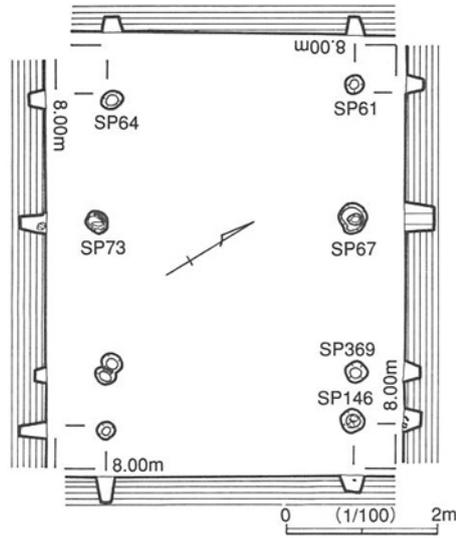


第14図 S B 1 6 出土遺物実測図

S B 3

S B 3 は、調査区北側に位置し、3間×1間の建物である。棟方向は、N60° W、桁行長4.38m、梁行長3.24m。柱間の平均は桁行方向1.46m、梁行方向3.24m。柱穴の規模は、直径18～36cm、深さ14～38cm。S P 61・73・369からは、土師器片が出土。S P 64からは緑釉陶器片が出土。S P 67から

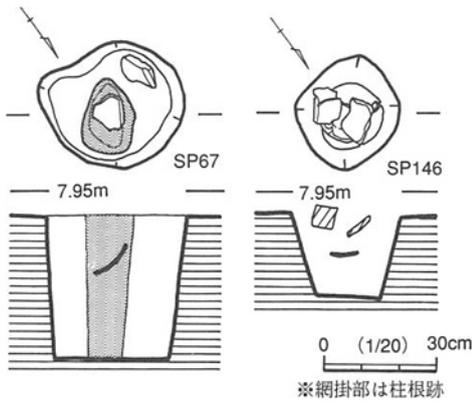
は、土師器碗が出土。S P146からは、土師器皿・土師器碗が出土。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代後期のものと推定される。



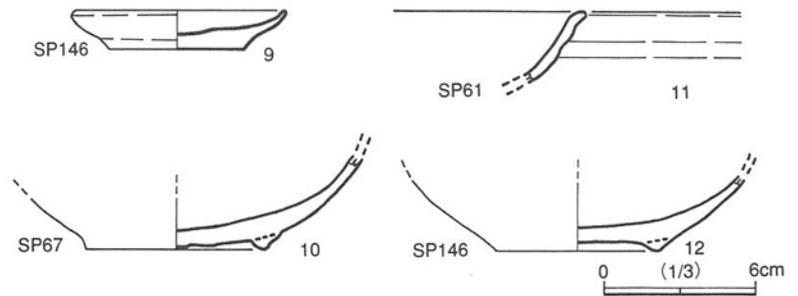
第15図 SB3実測図



S B 3 全 景 (南東から)



第16図 柱穴遺物出土状況実測図



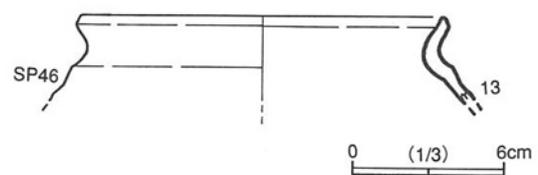
第17図 SB3出土遺物実測図

9はS P146の出土遺物で土師器皿。内外面ともに回転ナデの調整が見られる。底部には回転糸切り痕がある。10はS P67の出土遺物で土師器碗。底径7.0cm。底部は貼付高台。体部は内弯して立ち上がっている。外面はナデの跡が見られるが、内面は器面剥落のため調整不明。11はS P61の出土遺物で土師器碗。口縁端が、やや外反する。12はS P146の出土遺物で土師器碗。底径6.4cm。底部は貼付高台。

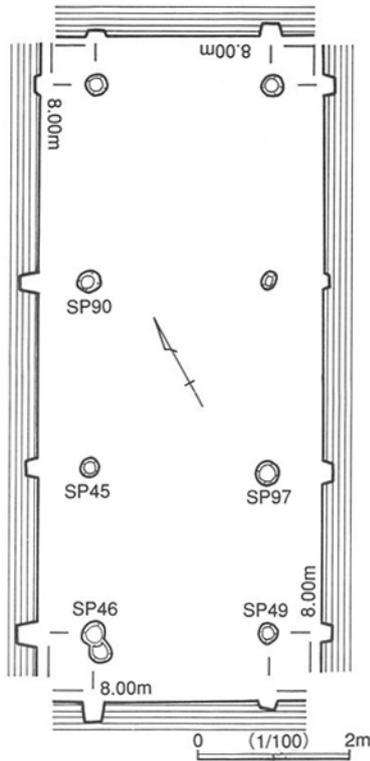
SB6

SB6は、調査区中央部に位置し、3間×1間の建物である。棟方向は、N28° E、桁行長7.2m、梁行長2.3m。柱間の平均は桁行方向2.4m、梁行方向2.3m。柱穴の規模は、直径18~30cm、深さ6~28cm。S P45・49・90・97からは、土師器片が出土。S P46からは、土師器甕が出土。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のもものと推定される。

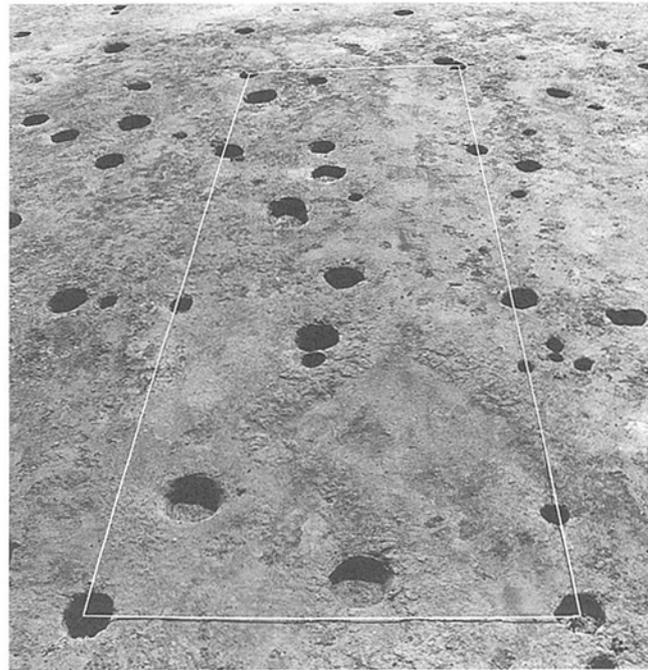
13はS P46出土遺物で土師器甕。口径7.0cm。内面全体に、燻したような黒い跡が見られる。外面の色調は、にぶい黄橙色 (10YR 7/2) である。



第18図 SB6出土遺物実測図



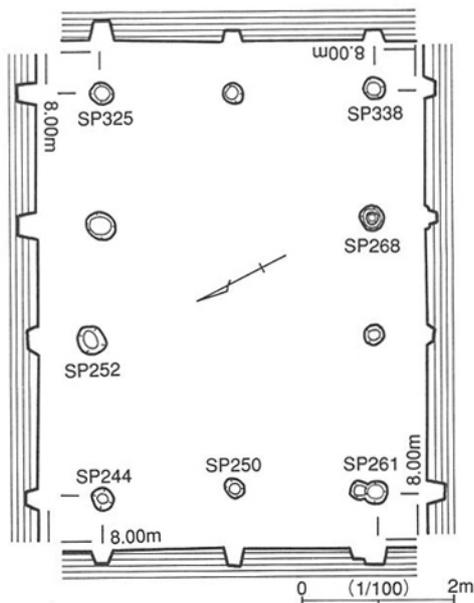
第19図 SB6実測図



S B 6 全 景 (南西から)

SB8

SB8は、調査区東側に位置し、3間×2間の建物である。棟方向は、 $N64^{\circ}W$ 、桁行長5.3m、梁行長3.6m。柱間の平均は桁行方向1.8m、梁行方向1.8m。柱穴の規模は、直径24~36cm、深さ8~23cm。SP244・250・252・261・268・325・338からは、土師器片が出土。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のものと推定される。



第20図 SB8実測図

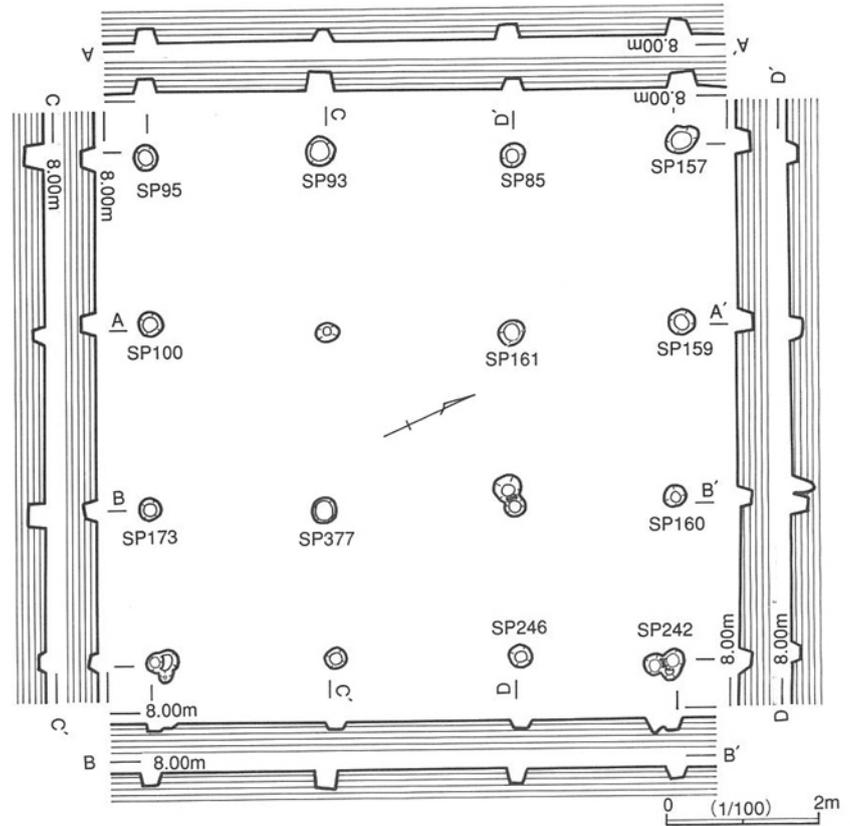


S B 8 全 景 (北西から)

SB7

SB7は、調査区中央部に位置し、3間×3間の建物である。棟方向は、 $N24^{\circ}E$ 、桁行長6.9m、

梁行長6.74m。柱間の平均は、桁行方向2.3m、梁行方向2.25m。柱穴の規模は、直径22～38cm、深さ9～25cm。SP85・93・157・160・161・246・377からは、土師器片が出土。SP95からは、土師器坏が出土。SP100からは、須恵器碗が出土。SP159からは、土師器片と緑釉陶器片が出土。SP173からは、土師器皿、土師器碗と土師器坏が出土。SP242からは、土師器片と須恵器片が出土。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のもものと推定される。

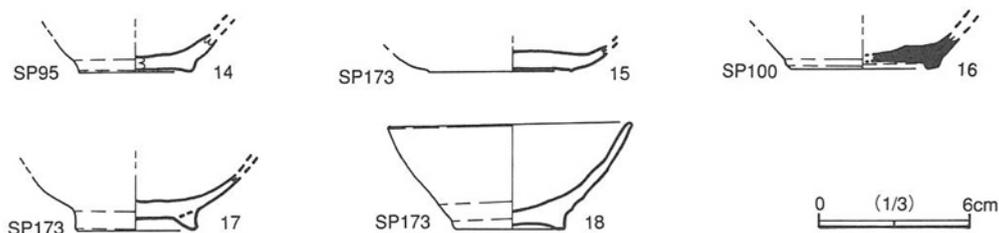


第21図 SB7実測図



SB7全景（南東から）

14はSP95の出土遺物で土師器坏。底径4.4cm。残度が悪く、調整は不明。15はSP173の出土遺物で土師器皿。底部に糸切り痕及び板目痕が見られる。16はSP100の出土遺物で須恵器碗。17はSP173の出土遺物で土師器碗。底径4.6cm。残度が悪く、調整は不明。18はSP173の出土遺物で土師器坏。底径4.4cm。器高4.0cm。口径9.5cm。底部に糸切り痕が見られる。



第22図 SB7出土遺物実測図

第1表 VI地区 掘立柱建物一覧表

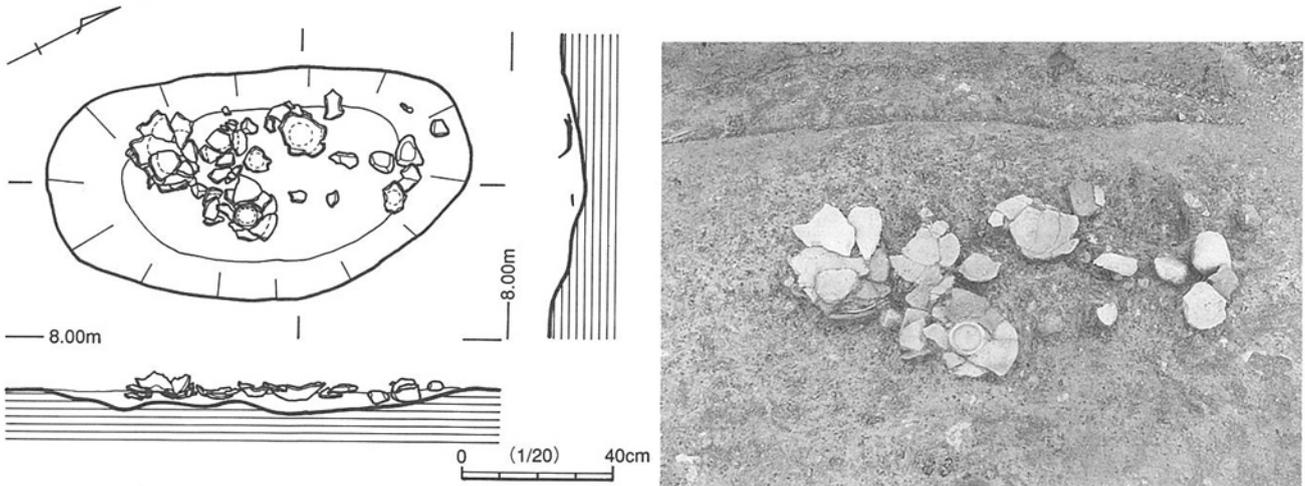
規模 (間)	建物番号	棟方向	柱 間		面積 ㎡(坪)	出土遺物	時代
			桁 行	梁 行			
			建物の南西隅から m	建物の南西隅から m			
1×1	S B 4	N70° W	4.0	3.8	15.2(4.6)	土師器碗	平安
2×1	S B 1	N17° E	4.2(1.86・2.34)	3.86	16.2(4.9)	土師器皿、須恵器片、緑釉陶器片	平安
	S B 10	N66° W	4.9(2.5・2.4)	2.6	12.7(3.9)	土師器(皿・坏)、須恵器片	平安
	S B 12	N18° E	3.78(1.86・1.92)	3.42	12.9(3.9)	土師器片、緑釉陶器片	平安
	S B 15	N34° E	4.46(1.8・2.66)	2.8	12.5(3.8)	土師器片、須恵器片、緑釉陶器片	平安
	S B 17	N68° W	3.8(2・1.8)	2.6	9.9(3.0)	須恵器片	平安
2×2	S B 5	N20° E	3.6(1.86・1.74)	3.32(1.52・1.8)	12.0(3.6)	土師器片、緑釉陶器片、黒色土器碗、瓦質土器片	平安
	S B 11	N78° W	5.6(3.3・2.66)	4.38(2.28・2.1)	26.1(7.9)	土師器甕、須恵器片、瓦質土器足鍋	平安
	S B 13	N74° W	4.8(2.4・2.4)	4.74(2.4・2.34)	22.8(6.9)	土師器(坏・甕)、須恵器片、緑釉陶器片、白磁碗	平安
	S B 14	N70° W	5.0(2.5・2.5)	4.6(2.54・2.06)	23.0(7.0)	土師器片、緑釉陶器片、石鍋片	平安
	S B 16	N69° W	4.6(2.32・2.28)	4.32(2.16・2.16)	19.9(6.0)	土師器皿、須恵器片	平安
	S B 18	N26° E	4.2(2.12・2.08)	3.4(1.7・1.7)	14.3(4.3)	土師器片	平安
3×1	S B 3	N60° W	4.38(1.68・2・0.7)	3.24	14.2(4.3)	土師器(皿・碗)、緑釉陶器片	平安後期
	S B 6	N28° E	7.2(2.14・2.46・2.6)	2.3	16.6(5.0)	土師器甕	平安
	S B 9	N66° W	5.44(1.36・2.1・1.98)	3.04	16.5(5.0)	土師器片、須恵器片、黒色土器片、瓦質土器足鍋	中世
3×2	S B 2	N73° W	8.04(3.8・1.6・2.64)	4.92(2.52・2.4)	39.6(12.0)	土師器皿、須恵器片	平安
	S B 8	N64° W	5.3(2・1.8・1.5)	3.6(1.86・1.74)	19.1(5.8)	土師器片	平安
3×3	S B 7	N24° E	6.9(2.34・2.46・2.1)	6.74(2.36・2.34・2.04)	46.5(14.1)	土師器(皿・坏・碗)、須恵器碗、緑釉陶器片	平安

(2) 土坑

今回の調査でVI地区から7基の土坑が検出された。後世の削平のため残存状況は悪いが、埋土及び出土遺物から平安時代から中世のものと推定できる。(第2表)

SK 1

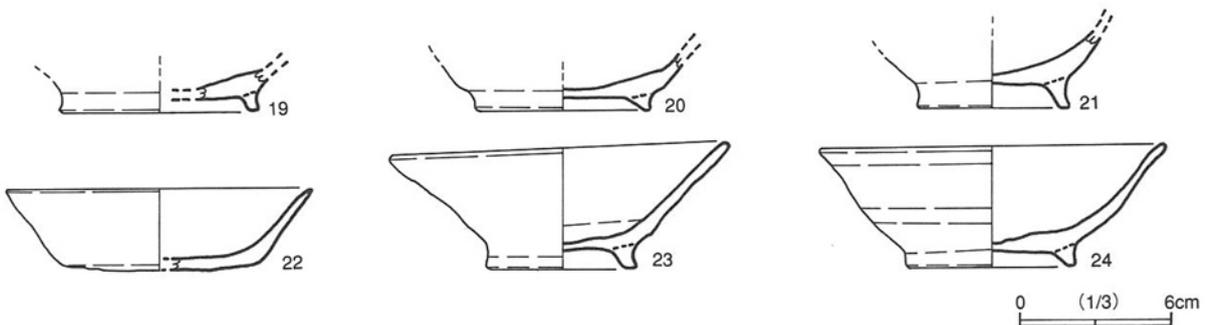
SK 1は、調査区西側に位置する長円形の土坑。規模は長軸112cm、短軸61cm、深さ9cm。埋土中から土師器杯、土師器碗、土師器甕などが出土。埋土や出土遺物から、この土坑は平安時代のものと推定される。



第23図 SK 1実測図

SK 1 土器出土状況(南東から)

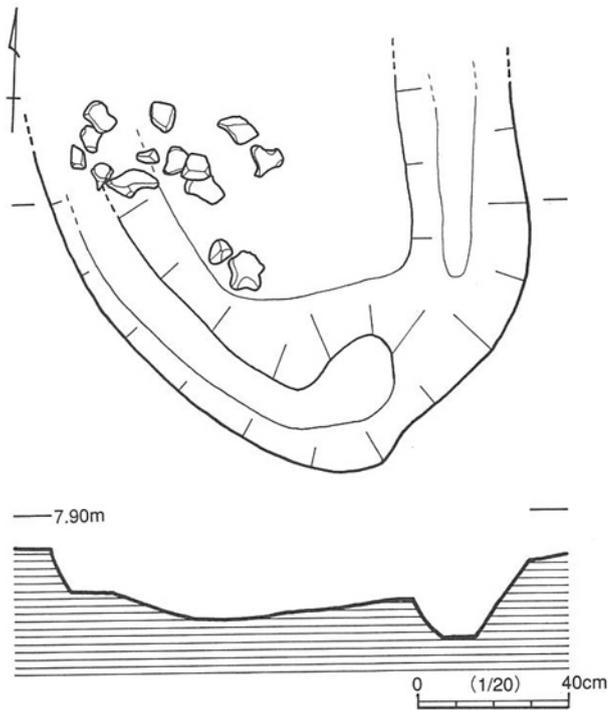
19は土師器碗。底部は貼付高台。底径7.5cm。器面剥落のため調整不明。20は土師器碗。底部は貼付高台。底径6.7cm。外面にナデの調整痕が見られる。21は土師器碗。底径5.9cm。底部は貼付高台。外面にナデの調整痕が見られる。22は土師器杯。底径7.8cm。器高3.2cm。口径6.0cm。器面剥落のため調整不明。23は土師器碗。底径6.0cm。器高5.0cm。口径13.5cm。底部は貼付高台。口縁部にススが附着している。24は土師器碗。底径6.7cm。器高4.8cm。口径13.7cm。底部は貼付高台。外面の一部にナデの跡が見られる。



第24図 SK 1出土遺物実測図

SK 3

SK 3は、調査区北部に位置する不整形の土坑。規模は削平を受けているため不明。埋土は褐灰色(10YR 4/1)粘質土に明黄褐色(10YR 6/8)粘質土がブロック状に入ったもので、マンガン粒を含んでいる。埋土中から土師器杯、土師器碗、須恵器片、緑釉陶器片、黒曜石片などが出土。埋土や出土遺物から、この土坑は平安時代のものと推定される。



S K 3 土器出土状況 (南東から)

第25図 S K 3 実測図

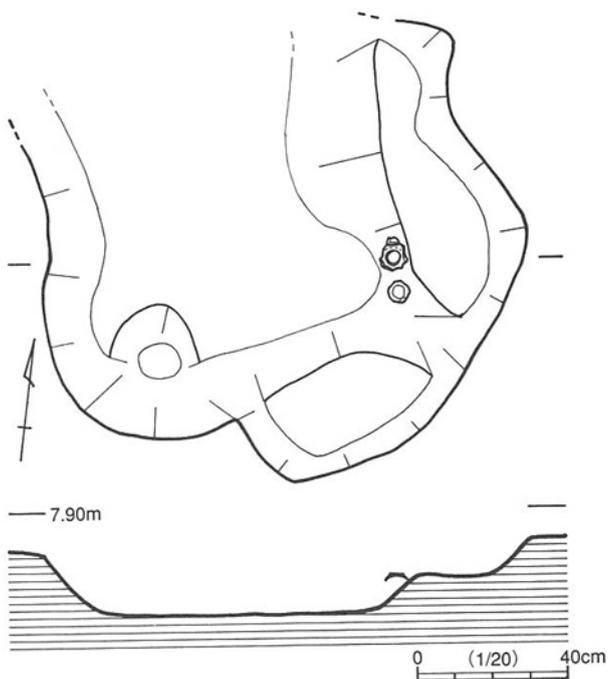
25は土師器坏。底径4.2cm。底部に糸切り痕が見られる。器面剥落のため調整不明。26は土師器碗。底径7.0cm。底部は貼付高台。器面剥落のため調整不明。



第26図 S K 3 出土遺物実測図

S K 4

S K 4 は、調査区北部に位置する不整形の土坑。規模は不明。埋土は褐灰色 (10YR 5/1) 粘質土に明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土がブロック状に入ったもので、マンガン粒を含んでいる。埋土中か

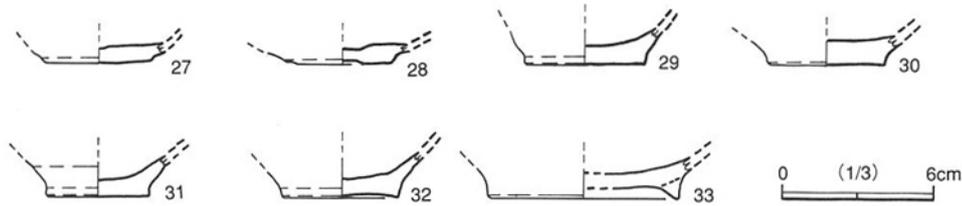


S K 4 土器出土状況 (南西から)

第27図 S K 4 実測図

ら土師器坏、土師器碗が出土。埋土や出土遺物から、この土坑は平安時代のものと推定される。

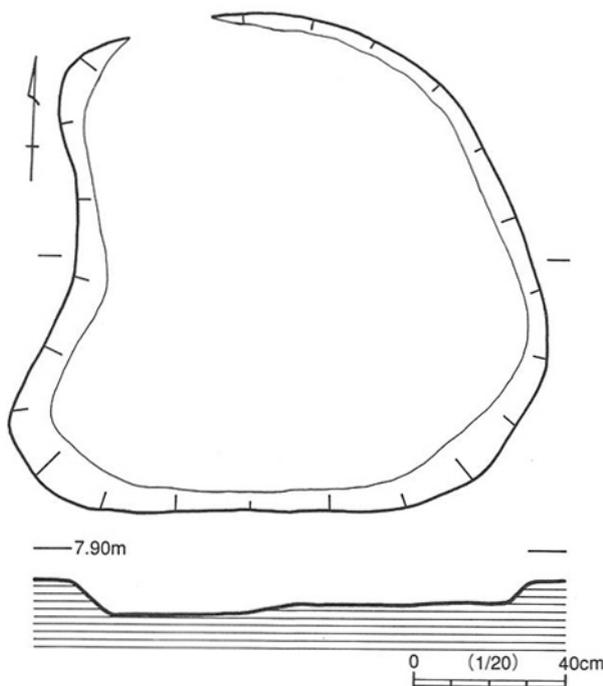
27は土師器坏の底部。底径4.2cm。28は土師器坏の底部。底径4.0cm。底部に、糸切り痕と糸切りの糸で底部が欠損した痕跡が見られる。29は土師器坏の底部。底径4.7cm。底部に、糸切り痕が見られる。30は土師器片の底部。底径4.7cm。底部に、糸切り痕が見られる。31は土師器坏の底部。底径4.0cm。底部に、糸切り痕が見られる。32は土師器坏の底部。底径4.7cm。底部に、糸切り痕が見られる。体部の内外面にナデの調整痕が見られる。33は土師器碗。底部に低い高台がつく。底径7.6cm。器面剥落のため調整不明。



第28図 S K 4 出土遺物実測図

S K 5

S K 5 は、調査区北部に位置する不整形の土坑。規模は長軸131cm、短軸119cm、深さ7cm。埋土は褐灰色（10YR 6/1）粘質土に明黄褐色（10YR 6/8）粘質土がブロック状に入ったもので、マンガン粒を含んでいる。埋土中から土師器坏が出土。埋土や出土遺物から、この土坑は平安時代のものと推定される。

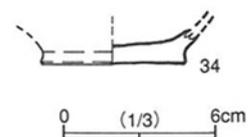


第29図 S K 5 実測図



S K 5 完 堀（南西から）

34は土師器坏。底径5.6cm。底部に糸切り痕及び板目痕が見られる。体部内外面ともにナデの調整痕が見られる。



第30図 S K 5 出土遺物実測図

第2表 VI地区土坑一覧表

番号	平面図	規 模			出 土 遺 物	時 代
		長 軸	短 軸	深 さ		
1	長円形	1 1 2	6 1	9	土師器(坏・椀・甕)	平 安
2	長円形	1 1 2	9 2	1 1	土師器片	平 安
3	不整形	—	—	—	土師器(坏・椀)、須恵器片、緑釉陶器片、黒曜石片	平 安
4	不整形	—	—	1 8	土師器(坏・椀)	平 安
5	不整形	1 3 1	1 1 9	7	土師器坏	平 安
6	長円形	1 8 6	1 6 7	2 9 7		
7	不整形	—	—	—		

(3) 柱穴状小ピット

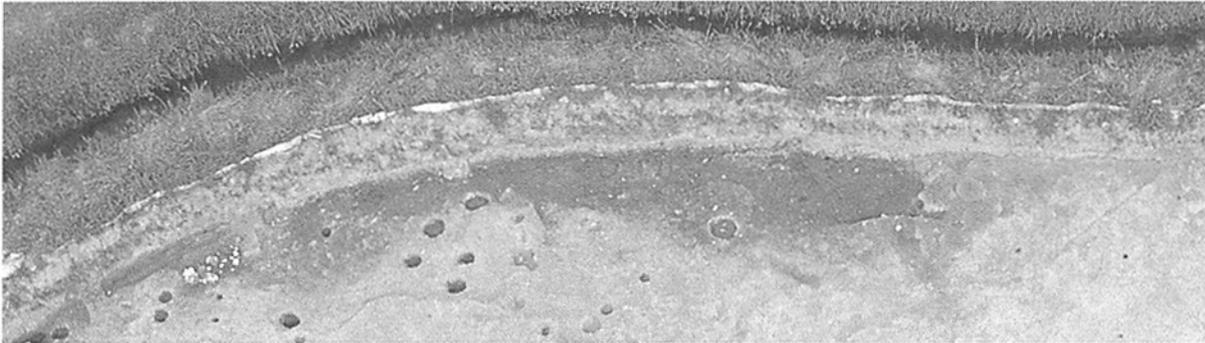
VI地区から約950個の柱穴状小ピットが検出された。大部分は調査区中央から東側に見られ、約2分の1の柱穴状小ピットから遺物が出土した。出土遺物から平安時代から中世にかけての遺構であることが推定される。

35はS P 8の出土遺物で土師器椀。底部は、糸切りで貼付高台。36はS P 142の出土遺物で土師器坏。底部に糸切り痕が見られる。37はS P 258の出土遺物で土師器坏。底部に糸切り痕が見られる。38はS P 79の出土遺物で土師器椀。底部はハの字状に開く高台が付く。39はS P 84の出土遺物で土師器坏。40はS P 240の出土遺物で土師器皿。底径5.8cm、器高1.7cm、口径7.8cm。内側に回転ナデの調整痕が見られる。41はS P 361の出土遺物で土師器椀。42はS P 169の出土遺物で土師器椀。底部は貼付高台。43はS P 356の出土遺物で土師器皿。底径6.2cm、器高1.8cm、口径9.6cm。内側に回転ナデの調整跡が見られる。44はS P 154の出土遺物で土師器椀。口径13.6cm。口縁部の一部にナデの調整跡が見られる。45はS P 304の出土遺物で内黒の黒色土師器椀。底部にハの字状に開く高台が付く。外面にナデの調整跡が見られる。46はS P 16の出土遺物で土師器坏。底部に回転糸切り痕がある。47はS P 255の出土遺物で土師器椀。48はS P 202の出土遺物で土師器椀。底径6.2cm。底部は糸切り後高台を貼り付けた跡が見られる。49はS P 128の出土遺物で土師器椀。底径6.7cm、器高5.4cm、口径12.9cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外に開く。50はS P 202の出土遺物で土師器椀。51はS P 124の出土遺物で土師器椀。底径5.9cm。底部は貼付高台。体部は内弯して立ち上がっている。内外面にナデの調整跡が見られる。52はS P 258の出土遺物で土師器皿。底部に糸切り痕がある。53はS P 365の出土遺物で土師器皿。底部に糸切り痕が見られる。54はS P 16の出土遺物で土師器椀。底径8.3cm、器高6.0cm、口径14.5cm。底部は貼付高台。55はS P 295の出土遺物で土師器椀。口縁部に回転ナデの調整跡が見られる。56・59はS P 105の出土遺物で土師器坏。57はS P 354の出土遺物で瓦質土器鍋。内面にハケ目の調整跡、外面には指頭圧痕及び回転ナデの跡が見られる。58はS P 6の出土遺物で土師器甕。60～65はS P 105の出土遺物。60は土師器椀。底部は貼付高台。61は土師器坏。底部に糸切り痕がある。体部は直線的に立ち上がり、口縁は外に開く。62は土師器坏。体部は内弯して立ち上がり、口縁は外に開く。63は土師器坏。底径5.0cm、器高5.1cm、口径12.0cm。体部は内弯して立ち上がり、口縁は外に開く。64は瓦質土器こね鉢。65は瓦質土器甕。内外面にタタキの調整跡が見られる。66はS P 21の出土遺物で砥石。泥質変岩製。

(4) その他

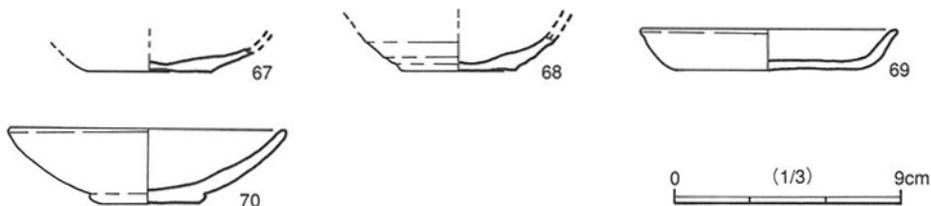
① 用途不明遺構

今回の調査で調査区西側に用途不明遺構を2基検出した。その遺構の内S X 1 から多量の遺物が出土した。平安時代の遺物が中心で、緑釉陶器片やトチン等も出土している。また、縄文時代の石斧も検出されている。

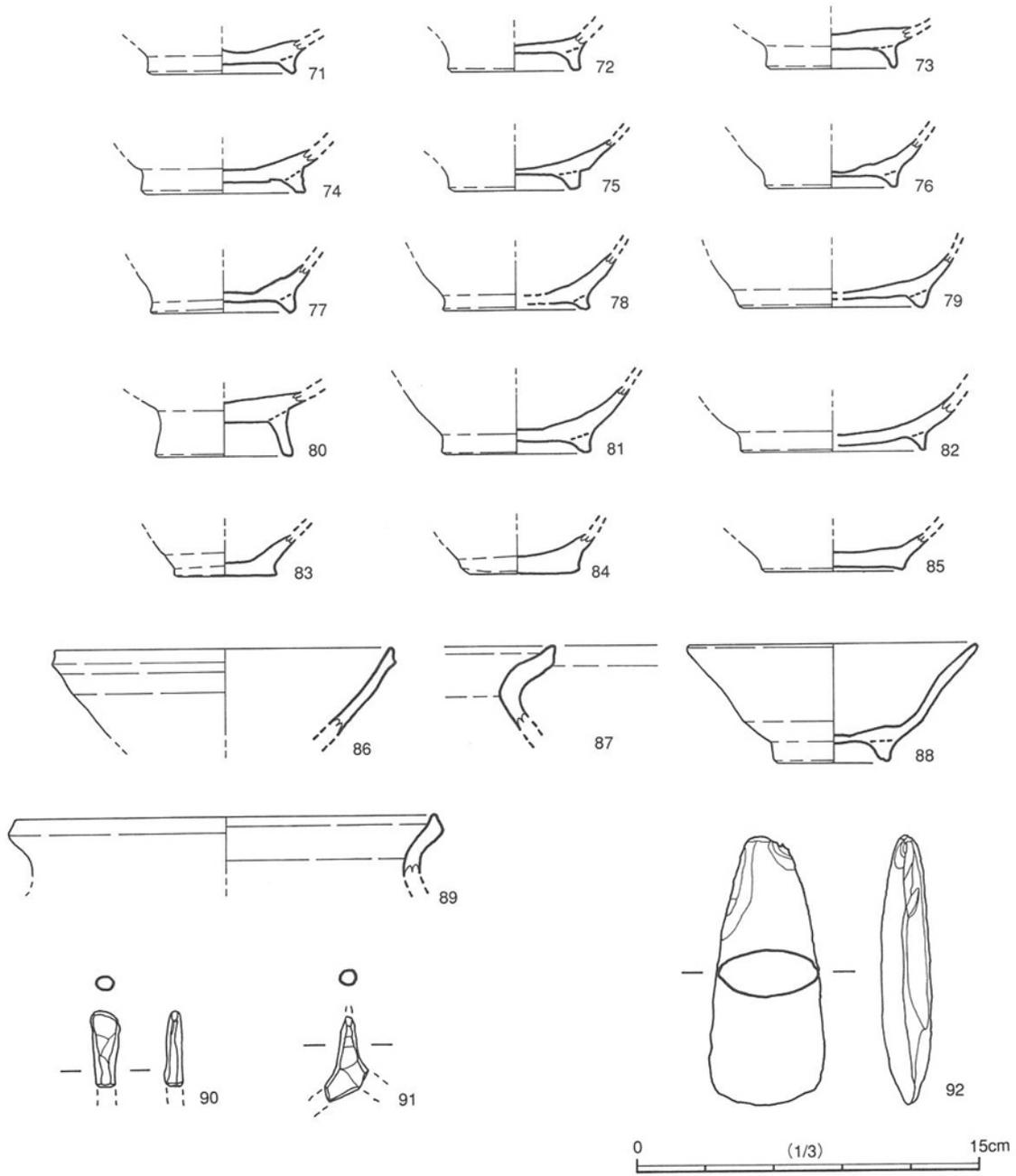


S X 1 全 景 (南東上空から)

67は土師器坏。底径4.7cm。底部に、糸切り痕及び板目痕が見られる。68は土師器坏。底径4.5cm。底部に、糸切り痕及び板目痕が見られる。また、体部外面に回転ナデ痕が見られる。69は土師器皿。底径7.0cm、器高1.65cm、口径9.8cm。体部の内外面に、ナデの調整痕が見られる。70は土師器坏。底径4.5cm、器高3.0cm、口径11cm。71~73は土師器碗。底部は貼付高台。74は黒色土器碗。底径6.8cm。底部は貼付高台。体部外面に、ナデの調整痕が見られる。75は土師器碗。底径5.8cm。底部にナデの調整痕が見られる。底部は貼付高台。76~79は土師器碗。底部は貼付高台。80は土師器碗。底径6.0cm。底部は高い貼付高台。81・82は土師器碗。底部は貼付高台。83は土師器坏。底径4.5cm。底部に糸切り痕が見られる。84は土師器坏。底径5.2cm。底部に糸切り痕及び回転ナデ痕が見られる。85は土師器坏。底径6.0cm。底部に、糸切り痕が見られる。86は白磁碗。灰白色の釉を施す。87は土師器甕。口縁部にヘラ削り痕が見られる。88は土師器碗。底径5.0cm、器高5.1cm、口径12.5cm。底部は貼付高台。体部は内弯して立ち上がり、体部半ばから外に開く。体部の内外面ともに回転ナデの調整跡が見られる。89は土師器甕。口径18.0cm。90はトチン。手捏ねで、断面は長円形。色調は灰白色(7.5YR 8/1)。91は三叉トチン。手捏ねで断面はほぼ円形。端部は扇形に広がる。色調は灰白色(7.5YR 8/1)。92は、泥岩製の磨製石斧。長さ11.6cm、巾4.4cm、厚さ2.1cm。縄文時代に属するもので、使用痕が見られる。



第32図 S X 1 出土遺物実測図(1)

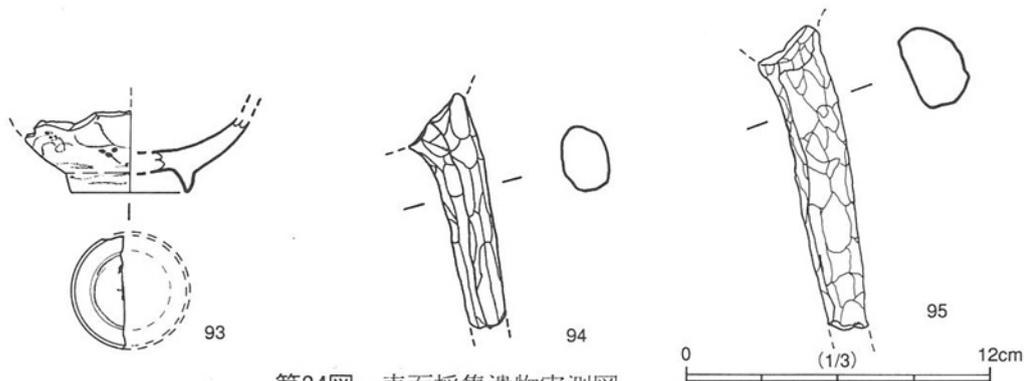


第33図 SX1 出土遺物実測図(2)

② 表面採集

遺構面検出中に出土した遺物をここで取り上げたい。

93は肥前焼の磁器碗。底部に「大明年製」と見られる銘をもつ。また、体部外面に唐草文が見られる。94・95は瓦質土器足鍋。



第34図 表面採集遺物実測図

4 VII地区の遺構と遺物

今回の発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑3基、溝・溝状遺構4条、柱穴状小ピット約220個の他、用途不明遺構が1基ある。遺構は大部分が調査区中央から西側にかけてある。特に平安時代の掘立柱建物跡としては、4年間の調査で最も大型の建物が検出されている。なお、各遺構の上面は、後世の水田開発により削平を受けており、遺存状況は全般的によくない。



第35図 VII地区遺構配置図



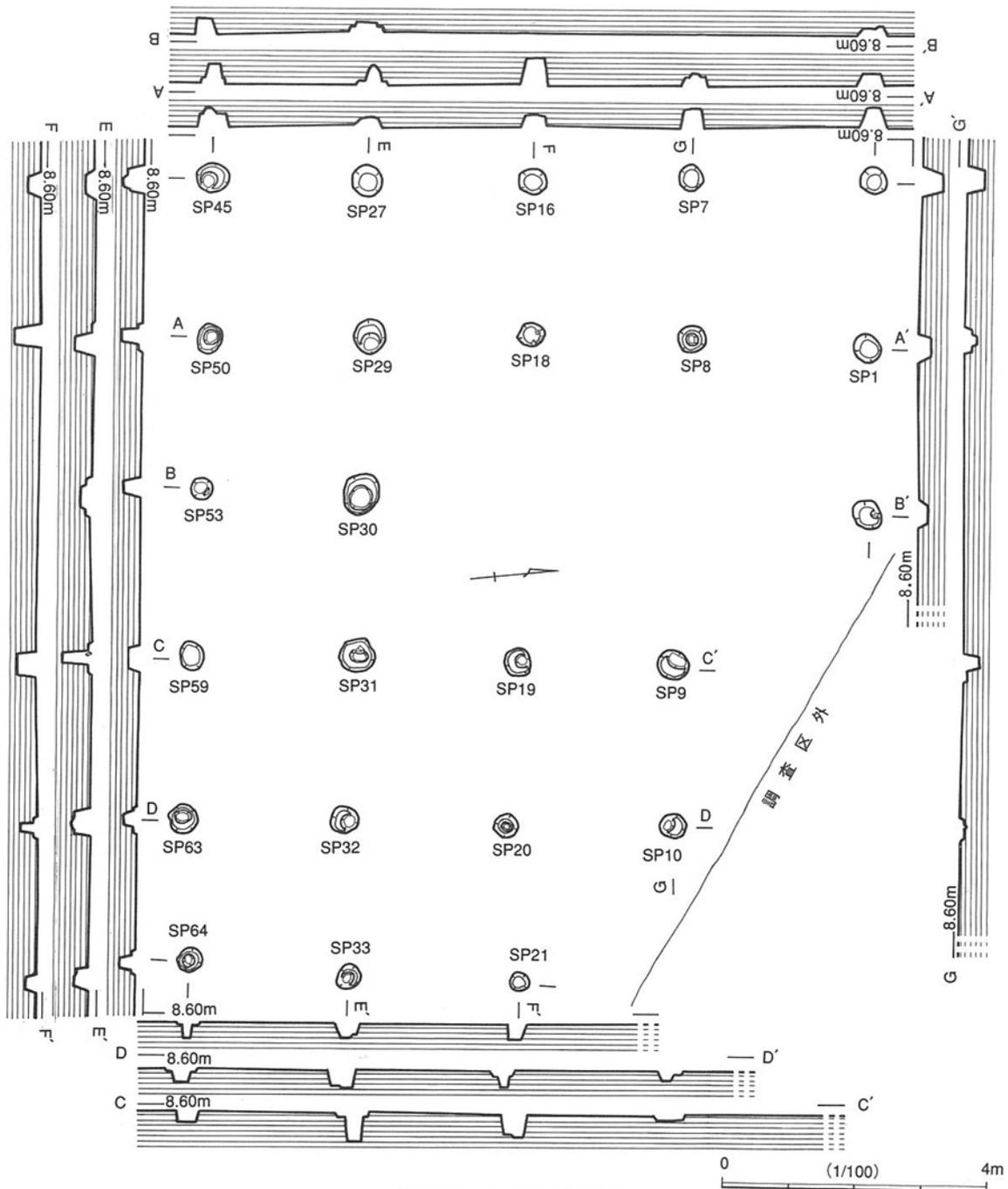
VII地区全景（上空から）

(1) 掘立柱建物跡

調査区内に多数の柱穴が検出され、その中から掘立柱建物跡が2棟復元できた(第35図・第3表)。他にも掘立柱建物として復元される可能性があるものもあるが、確実に柱穴が並ぶものを取り上げた。

SB1

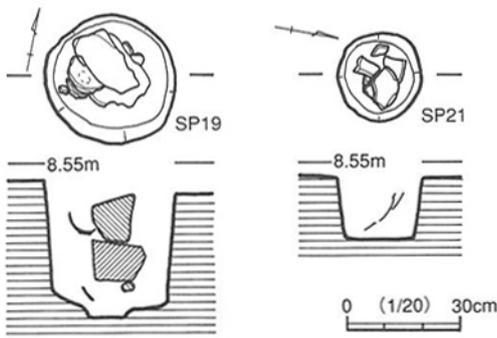
SB1は、調査区北西側に位置する。5間×4間の大型の掘立柱建物である。棟方向はN84°W、桁行長11.7m、梁行長9.88m。柱穴の規模は、直径24~58cm、深さ13~43cm。SP1・8・9・18・21・27・29・30・32・33・50・59・64からは土師器片が出土。SP10からは須恵器片が出土。SP16・53からは土師器片と須恵器片が出土。SP19からは土師器坏と土師器甕が出土。SP21から、黒色土器碗と土師器甕が出土。SP31からは土師器片と緑釉陶器片が出土。SP45からは青磁器片が出土。柱穴埋土や出土遺物から、この建物は平安時代のもものと推定される。



第36図 SB1実測図



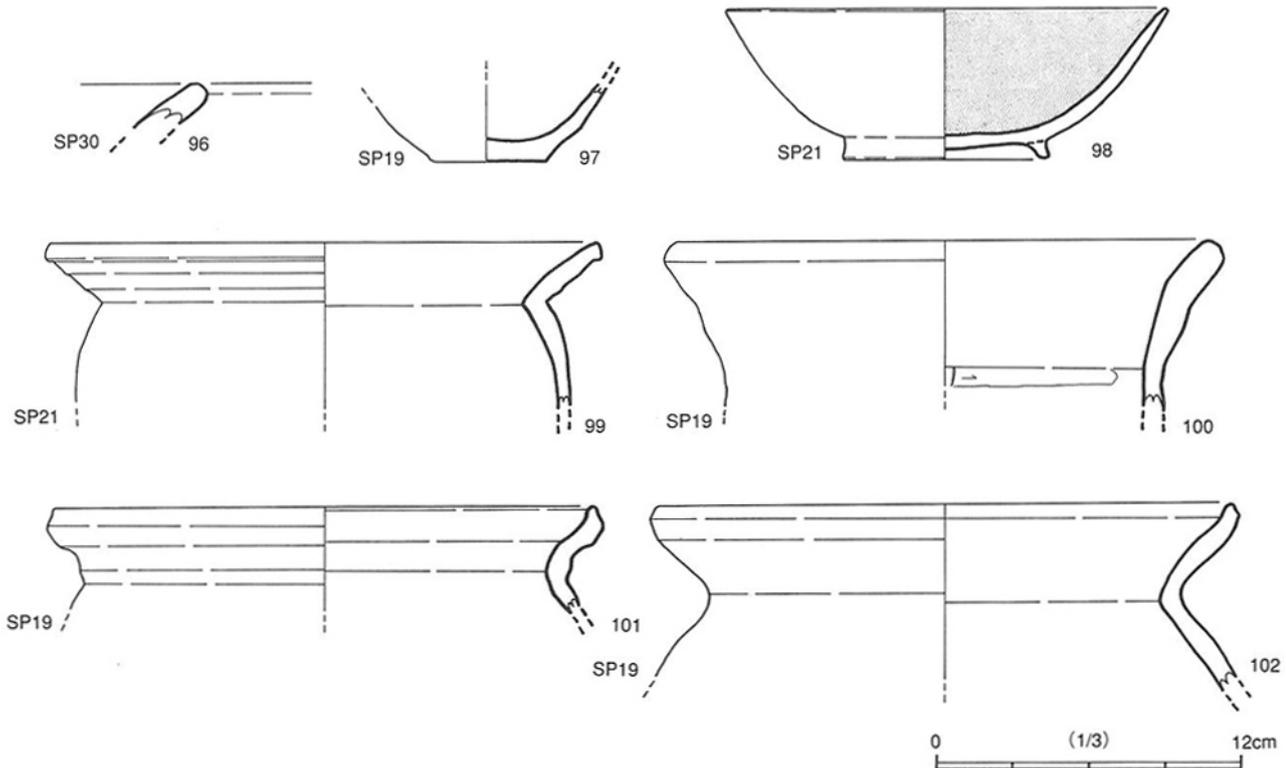
S B 1 全 景 (東 から)



96はS P 30の出土遺物で土師器甕。97はS P 19の出土遺物で土師器坏。底径4.5cm。底部に糸切り痕が見られる。体部内面に回転ナデの調整が見られる。98はS P 21の出土遺物で黒色土器碗。底径8.0cm、器高5.9cm、口径17.2cm。内面のみを燻した内黒土器。底部にハの字状に開く高台が付く。体部は内弯してのび、そのまま立ち上がる。99はS P 21の出土遺物で土師器甕。内面にナデ、外面にハケ後ナデの調整跡が見られる。100

第37図 柱穴遺物出土状況実測図

はS P 19の出土遺物で土師器甕。体部内面にケズリ後ヘラなでした調整跡が見られる。101・102はS P 19の出土遺物で土師器甕。101は口縁部に回転ナデの調整跡が見られる。



第38図 S B 1 出土遺物実測図

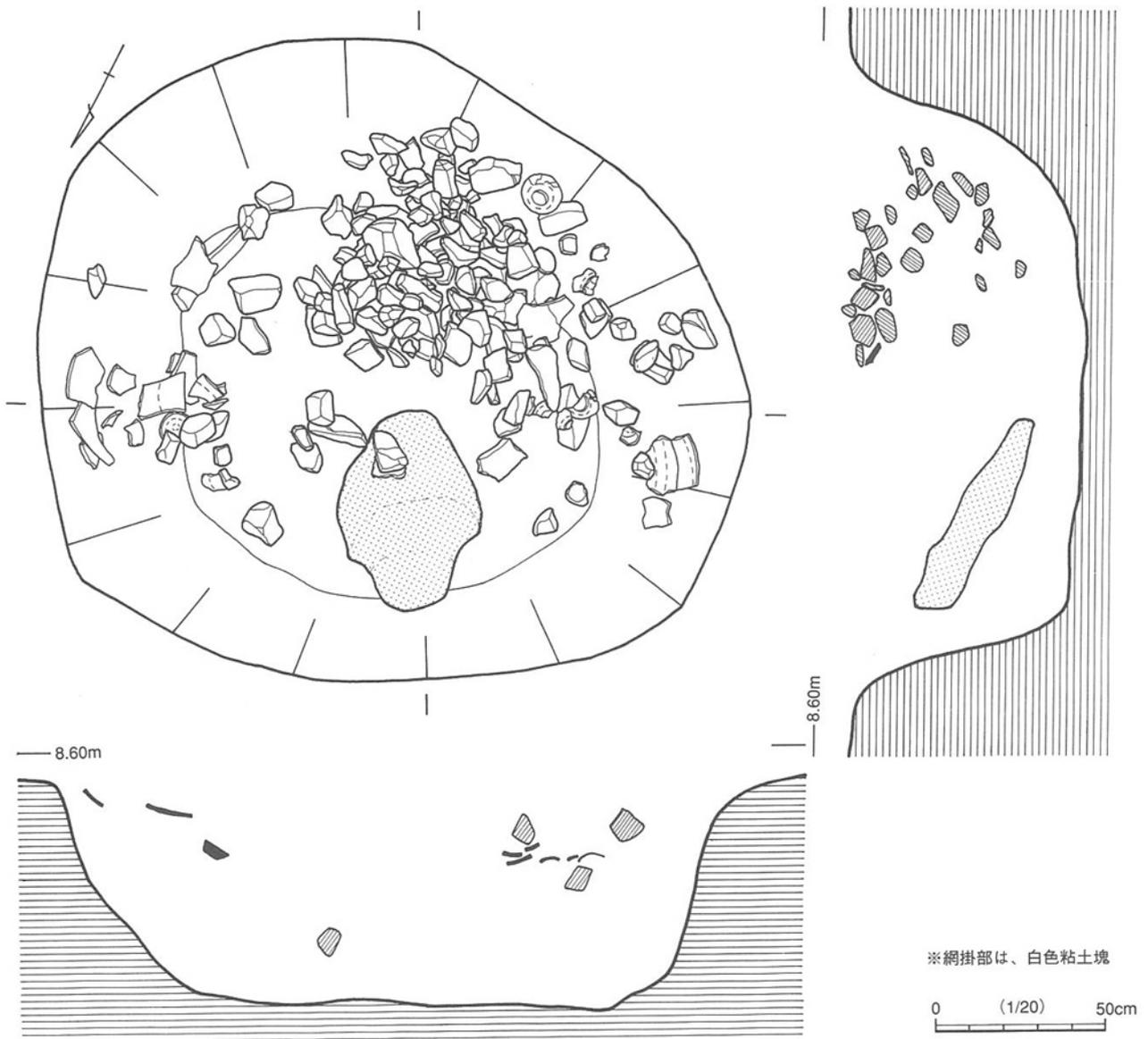
第3表 VII地区 掘立柱建物一覧表

規模 (間)	建物番号	棟方向	柱 間		面積 ㎡(坪)	出土遺物	時代
			桁 行	梁 行			
			建物の南西隅から m	建物の南西隅から m			
5×4	SB1	N84° W	11.7 (2.4・2.3・2.5・2.4・2.1)	9.88 (2.3・2.48・2.34・2.76)	115.6 (35.0)	土師器(坏・甕)、須恵器片、 黒色土器碗、緑釉陶器片、青磁片	平安
不明	SB2	N87° W	6.6+ α (2.26・2.04・2.3・ α)	2.44+ α	不明	土師器片、スラグ	不明

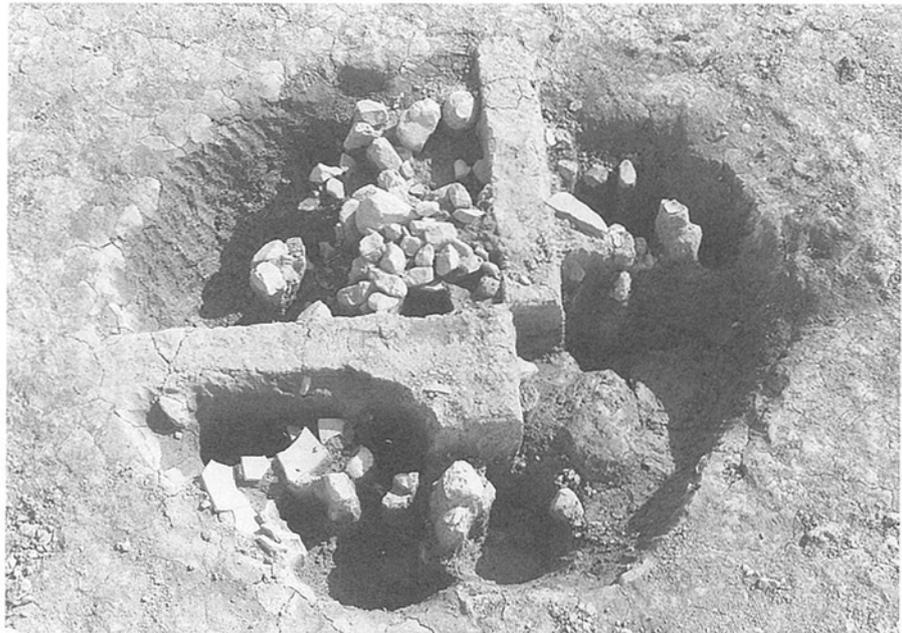
(2) 土坑

今回の調査でVII地区から3基の土坑が検出された。後世の削平のため残存状況は悪いが、埋土及び出土遺物から平安時代のものと推定できる。(第3表)

SK3



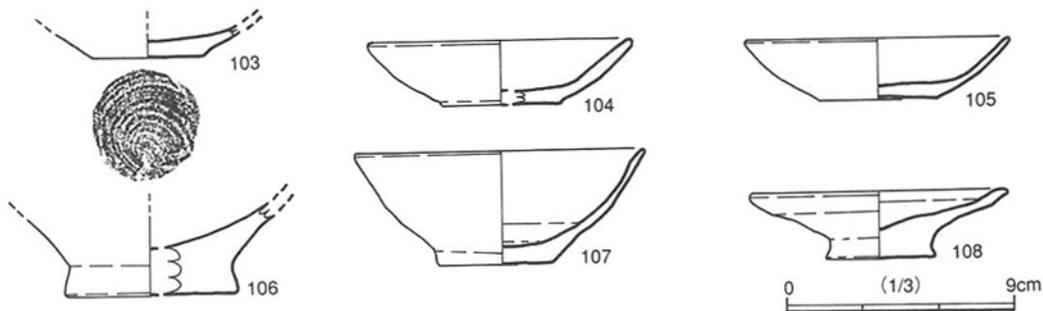
第39図 SK3実測図



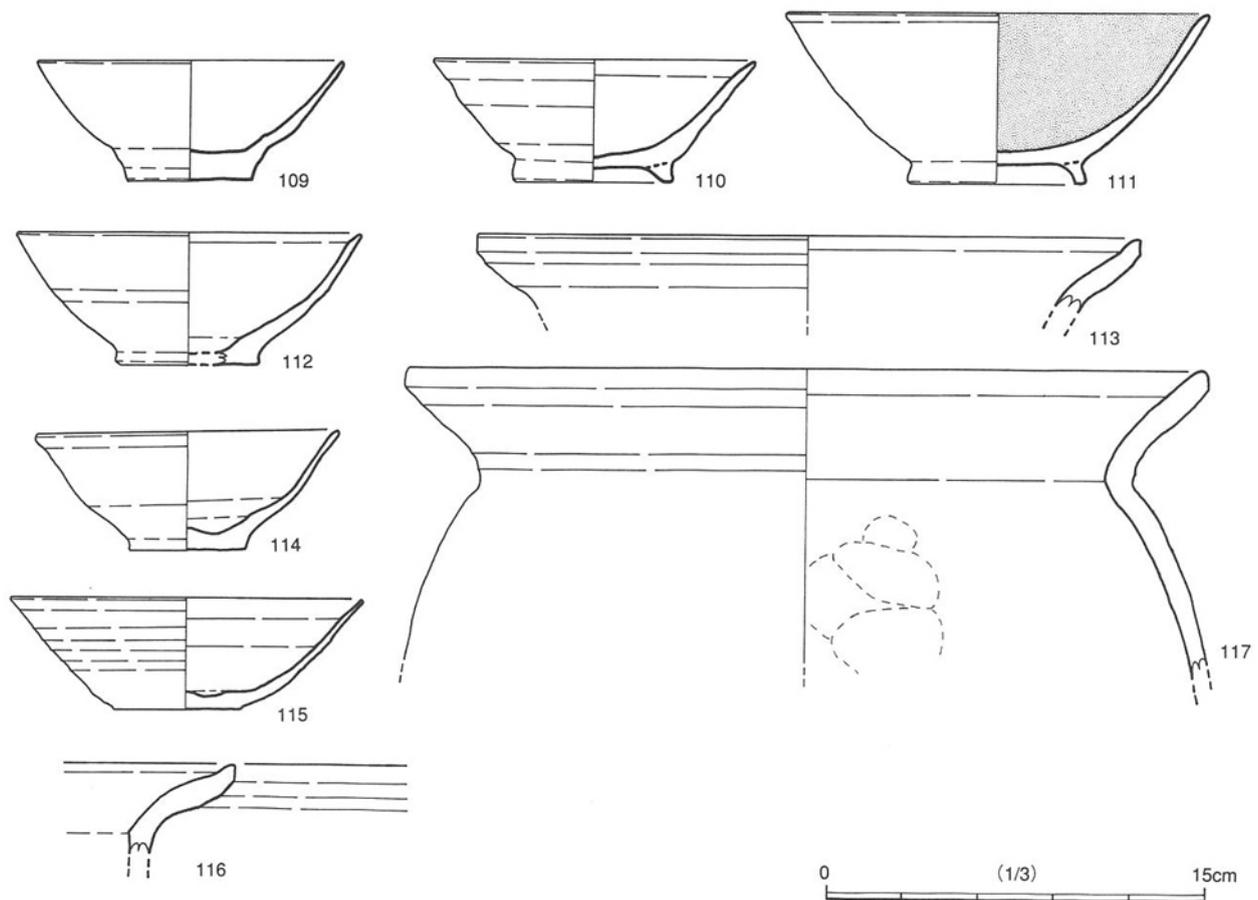
S K 3 土器出土状況
(北から)

S K 3 は、調査区中央部に位置する不整円形の土坑。規模は長軸219cm、短軸182cm、深さ71cm。埋土は褐灰色 (10YR 6/1) 粘質土に明黄褐色 (10YR 6/6) 粘質土がブロック状に入ったもので、マンガング粒を含んでいる。埋土中から土師器、須恵器、黒色土器、スラグ、白色粘土塊が出土。本遺跡付近は良質の粘土産地であるが、土坑中から粘土塊が出土する例はあまりない。埋土や出土遺物から、この土坑は平安時代のものと推定される。

103は土師器坏。体部内外面にナデの調整痕が見られる。底部に糸切り痕が見られる。104は土師器皿。底部に糸切り痕が見られる。内外面に回転ナデの調整跡が見られる。105は土師器皿。底部に板目痕が見られる。内外面にナデの調整跡が見られる。106は土師器坏。底部に糸切り痕が見られる。107は土師器坏。底径4.5cm、器高4.45cm、口径11.2cm。体部は内弯して立ち上がり、口縁部で外に開く。108は土師器皿。底部に糸切り痕が見られる。外面に回転ナデ後、縦方向にナデの調整跡が見られる。109は土師器坏。底径4.8cm、器高4.7cm、口径11.8cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁に至る。内外面にハケ後ナデの調整跡が見られる。110は土師器碗。底径6.0cm、器高4.8cm、口径12.6cm。底部は貼付高台。体部は内弯して立ち上がり、口縁は外に開く。内外面にナデの調整跡が見られる。111は黒色土器碗。底径6.8cm、器高6.7cm、口径16.4cm。底部は貼付高台で、ハの字状に開く。体部は内弯して立ち上がり、口縁部で外に開く。112は土師器坏。底部に糸切り痕が見られる。113は土師器甕。内外面にナデの調整跡が見られる。114は土師器坏。底径4.5cm、器高4.8cm、口径12.0cm。底部に回転糸切り痕が見られる。115は土師器坏。底径5.0cm、器高4.4cm、口径13.6cm。116は土師器甕。内外面にヘラ削りと回転ナデの調整跡が見られる。117は土師器甕。体部内外面に指圧痕が見られる。



第40図 S K 3 出土遺物実測図(1)



第41図 SK3出土遺物実測図(2)

第4表 VII地区土坑一覧表

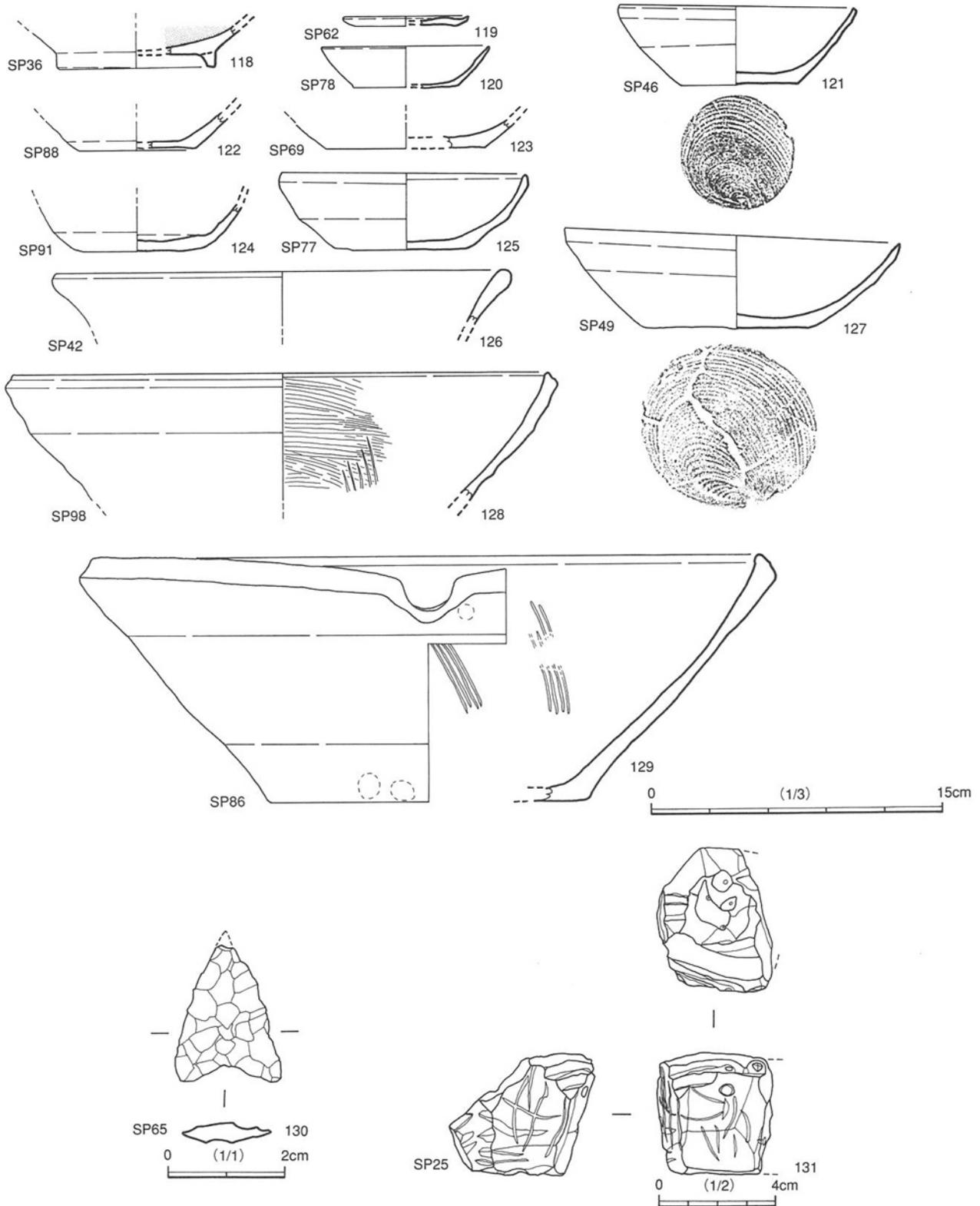
番号	平面図	規 模			出 土 遺 物	時 代
		長 軸	短 軸	深 さ		
1	不 整 形	6 8	6 6	2 9	土師器片	平 安 ？
2	隅丸長方形	7 6	5 6	2 0	土師器片、須恵器片	平 安
3	不 整 円 形	2 1 9	1 8 2	7 1	土師器(皿・坏・碗・甕)、須恵器甕、黒色土器碗、スラグ、白色粘土塊	平 安

(3) 柱穴状小ピット

VII地区から約220個の柱穴状小ピットが検出された。大部分は調査区中央から西側に見られ、その約2分の1から遺物が出土した。主に平安時代から中世にかけての遺物が検出された。

118はS P 36の出土遺物で黒色土器碗。内黒で底部は貼付高台。119はS P 62の出土遺物で土師器皿。120はS P 78の出土遺物で土師器皿。胎土精良。内外面に回転ナデの調整が見られる。121はS P 46の出土遺物で土師器坏。底径6.0cm、器高4.1cm、口径12.0cm。底部に回転糸切り痕が見られる。122はS P 88の出土遺物で土師器坏。底部に糸切り痕が見られる。123はS P 69の出土遺物で土師器坏。底部に糸切り痕が見られる。124はS P 91の出土遺物で土師器坏。125はS P 77の出土遺物で土師器坏。底径7.0cm、器高4.0cm、口径12.5cm。底部に回転糸切り痕が見られる。126はS P 42の出土遺物で土師器甕。127はS P 49の出土遺物で土師器坏。底径8.5cm、器高5.2cm、口径16.0cm。体部が内弯して立ち上がる。128はS P 98の出土遺物で土師質土器播鉢。内面に5条の櫛目で卸目が刻まれている。129はS P 86の出土遺物で瓦質土器播鉢。内面に4条の櫛目で卸目が刻まれている。外面底部には指頭圧痕が

見られる。130はSP65の出土遺物で石鏃。安山岩製。131はSP25の出土遺物で滑石製石製品。外面は立方体状に削って加工され、一面を臼状に彫りくぼめ、内側に数ヶ所小孔を穿っている。



第42図 SP出土遺物実測図

(4) 溝・溝状遺構

VII地区では、4条の溝・溝状遺構が検出された。4条とも後世の削平のためか深さ1～3cmと浅く、遺物も検出されなかったため時代は不明である。

5 まとめ

東禅寺・黒山遺跡でこれまでの調査面積は約9,800㎡に及ぶ。平成7年に調査を開始してから、4年間に、掘立柱建物跡75棟、土坑118基、溝・溝状遺構51条、柱穴約5,800個の遺構が検出され、多量の遺物が出土した。

本年度の調査では、中世の遺物を多数検出した昨年度と異なり、隣接する調査区でありながらも主に平安時代の遺構・遺物が出土された。特に、今回検出された掘立柱建物20棟のうち、平安時代に属するものが18棟と多数を占めている点が注目され、時期的な居住区の変遷を示唆するものと言えよう

今回検出された20棟のうち、中世と不明のものを除いた掘立柱建物群18棟は、大半が平安時代でも後半期のものと推定されるが、建物の重複や近接したのものがあることから、当然細かな時期差があるものとみられる。重複状況や棟方向の微妙な差異などからみれば、少なくとも2～3期の変遷が推測されるところであるが、今回の調査区のみで判別するには限界がある。次年度以降の調査結果をふまえて、改めて検証する必要がある。

今回検出された建物群の規模について面積でみると、面積が10～15㎡の建物が全体の33%と最も多く、次が面積15～20㎡で全体の27%。3番目が面積20～25㎡となっている（第5表）。

近隣の遺跡を見てみると、上辻・大歳・今宿西遺跡では、面積が15～20㎡の建物が全体の33%と最も高く、2番目が面積5～10㎡で全体の26%、3番目が面積10～15㎡となっている。下右田遺跡では、面積15～20㎡が全体の33%と最も多く、次に面積25～30㎡の建物、面積5～10㎡の建物へと続く。

面積が5～30㎡の建物で見ていくと、東禅寺・黒山遺跡では全体の83%、上辻・大歳・今宿西遺跡では全体の99%、下右田遺跡では全体の83%を占めることになる。

これらのことから、本遺跡付近の平安時代の掘立柱建物の規模は、大半が5～30㎡内にあるという傾向をみてとることができる。これに対して、VI地区のSB2（39.6㎡）・SB



第43図 重複した建物配置図

第5表 建物規模一覧表（平安時代）

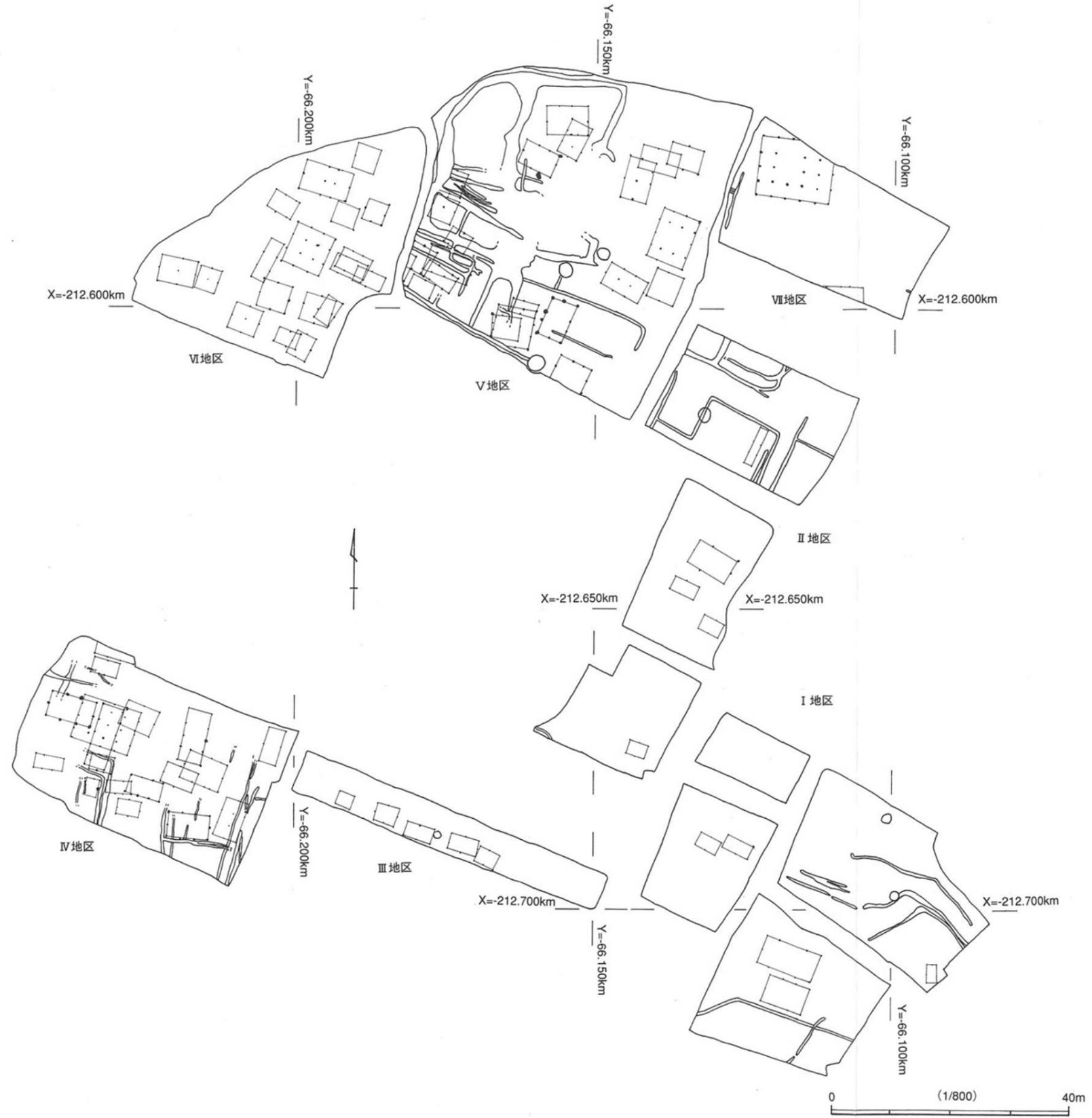
面積(㎡)	規模(間)	1×1	2×1	2×2	3×1	3×2	3×3	5×4	計
5	～ 10	0	1	0	0	0	0	0	1
10	～ 15	0	3	2	1	0	0	0	6
15	～ 20	1	1	1	1	1	0	0	5
20	～ 25	0	0	2	0	0	0	0	2
25	～ 30	0	0	1	0	0	0	0	1
30	～ 35	0	0	0	0	0	0	0	0
35	～ 40	0	0	0	0	1	0	0	1
40	～ 45	0	0	0	0	0	0	0	0
45	～ 50	0	0	0	0	0	1	0	1
115	～ 120	0	0	0	0	0	0	1	1
	計	1	5	6	2	2	1	1	18

7 (46.5㎡)、Ⅶ地区のSB1 (115.6㎡) はいずれもこの傾向をこえた規模の大きいものであり、当時の建物としては異質的な存在と言えよう。特にⅦ地区のSB1は、規模がⅥ・Ⅶ地区の中で比較しても突出しているだけでなく、近隣の遺跡の建物と比較しても最大規模を有しており、集落内におけるその性格が注目される場所である。平成8年度の調査でもⅣ地区のSB5 (72.52㎡) のようにこれに次ぐ規模の大型の建物が検出されているが(第44図)、時期的な変遷の中での全体的な配置状況やこうした建物のもつ意味、さらには遺跡全体の性格についても、今後の調査においてさらに検証していく必要がある。

なお、今回の調査でも緑釉陶器やトチンが出土した。窯道具の出土は、近辺において緑釉陶器の生産がなされていたことを間接的に物語るものである。周防国府跡でも同様の状況がうかがわれるが、こうした緑釉陶器の生産が、特定の集落内に付随した形で小規模になされていた可能性を示唆するものでもある。窯自体の確認が前提となるが、「長門の瓷器」の実態を解明していく上でも、次年度以降の調査に期待をつなぐものといえよう。

参考文献

山口県教育委員会	『下右田遺跡』	1978年
山口市教育委員会	『周防鑄銭司跡』	1984年
山口県教育委員会	『上辻・鑄銭司大歳・今宿西』	1984年
国立歴史民族博物館	『国立歴史民族博物館 研究報告 第22集』	1989年



第44図 東禅寺・黒山遺跡 I～IV主要遺構配置図

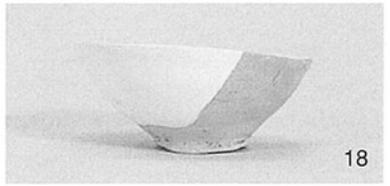
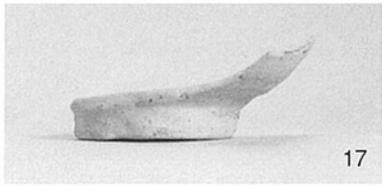
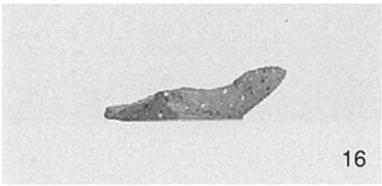
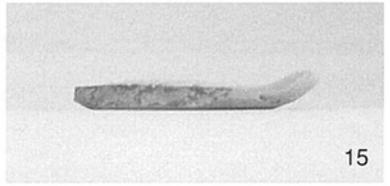
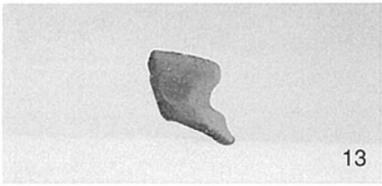
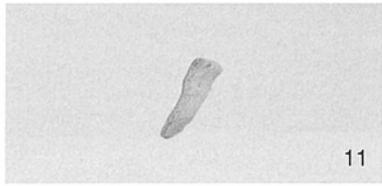
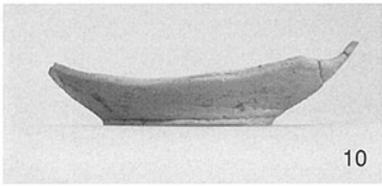
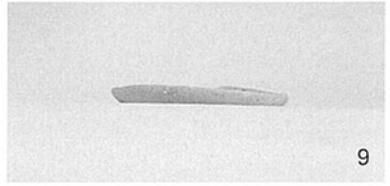
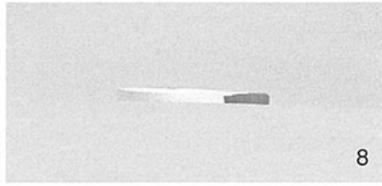
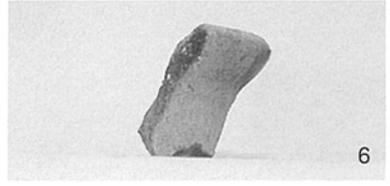
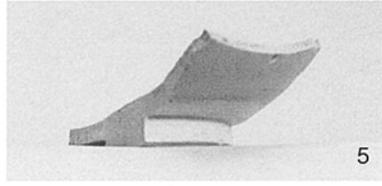
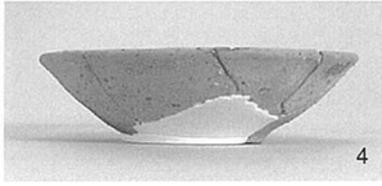
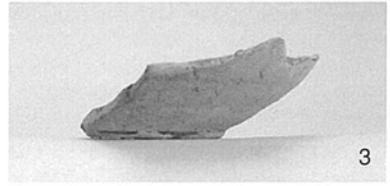
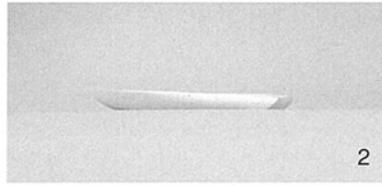
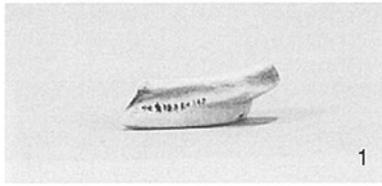


調査区遠景（陶ヶ岳から）

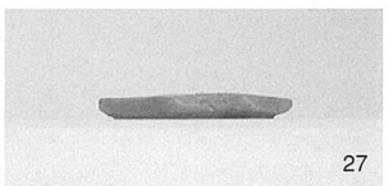
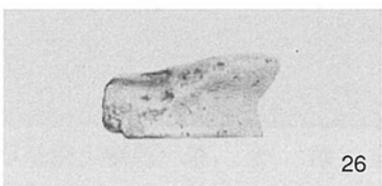
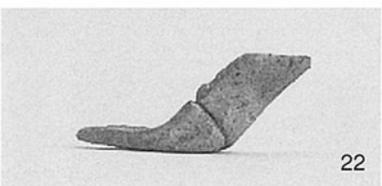
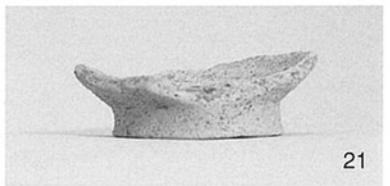
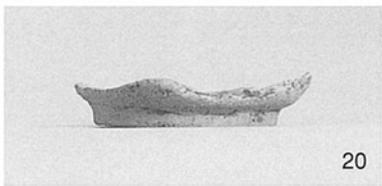
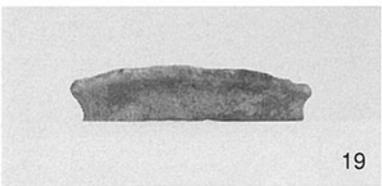


遺跡全景（遺跡上空から）

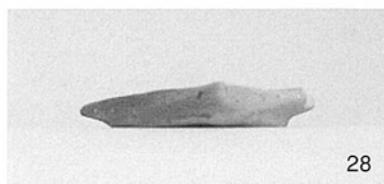
图版 2



VI地区 SB出土遺物



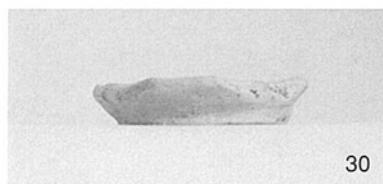
VI地区 SK出土遺物



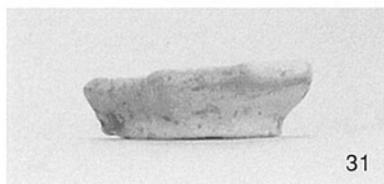
28



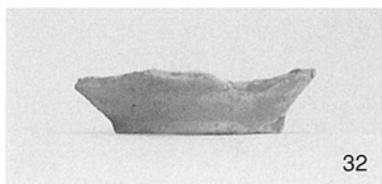
29



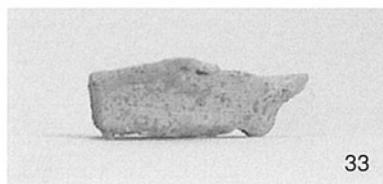
30



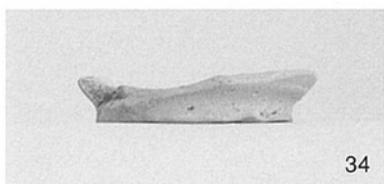
31



32

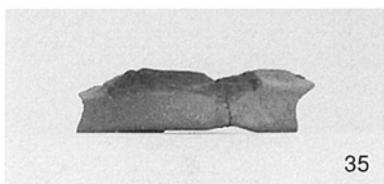


33

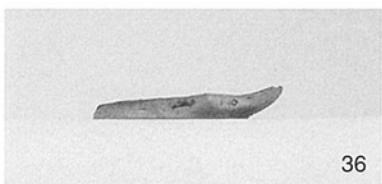


34

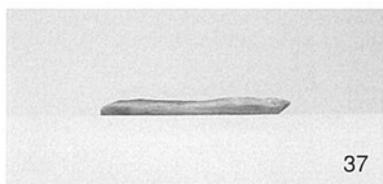
VI地区 SK出土遺物



35



36



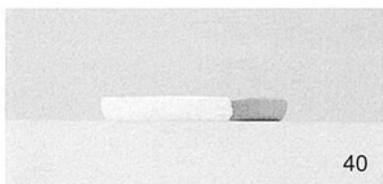
37



38



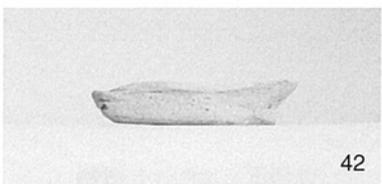
39



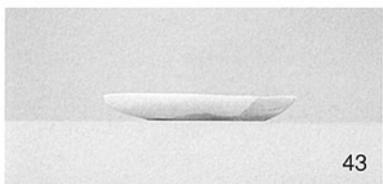
40



41



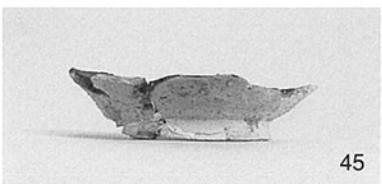
42



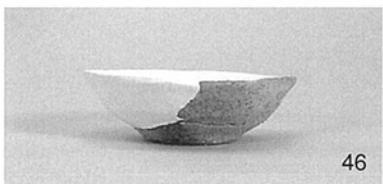
43



44



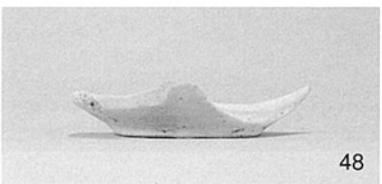
45



46



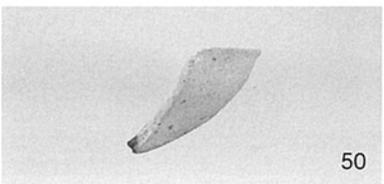
47



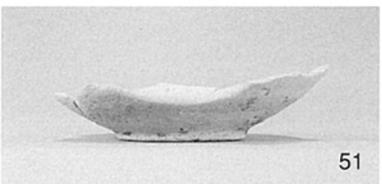
48



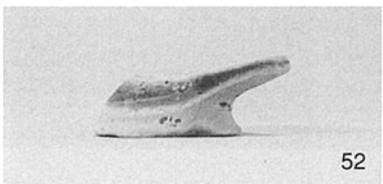
49



50



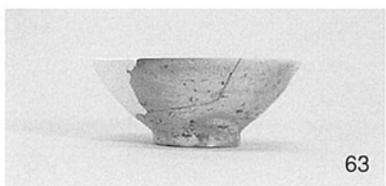
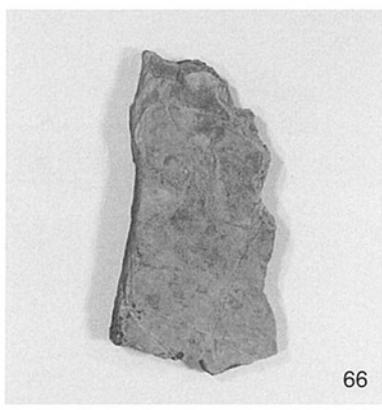
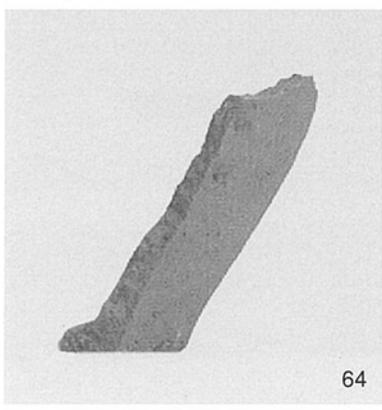
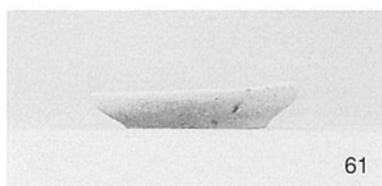
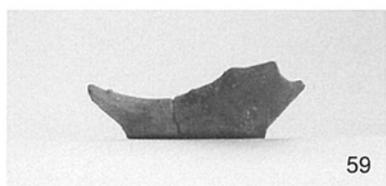
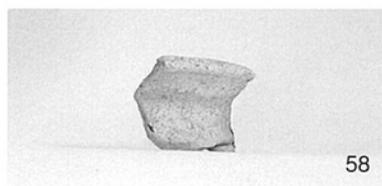
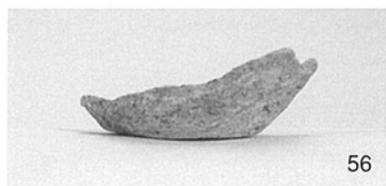
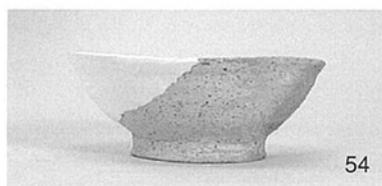
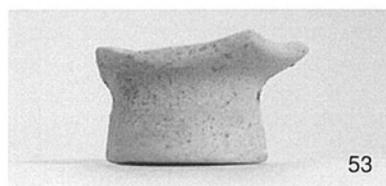
51



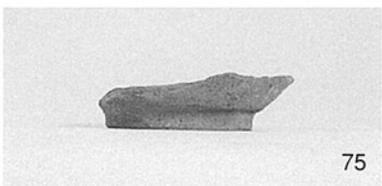
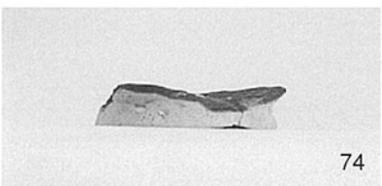
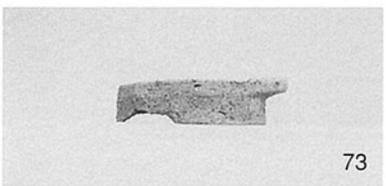
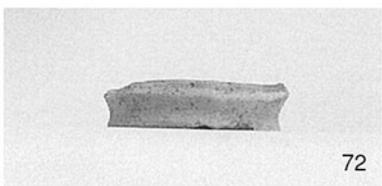
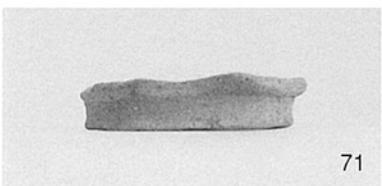
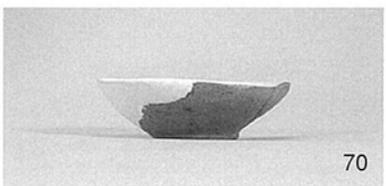
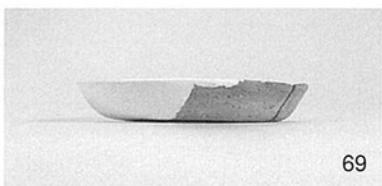
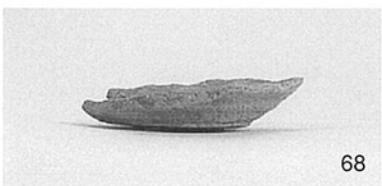
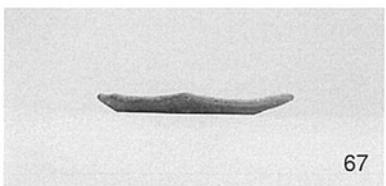
52

VI地区 SP出土遺物

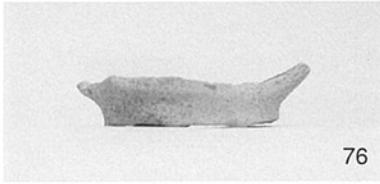
图版 4



VI地区 SP出土遺物



VI地区 SX1出土遺物



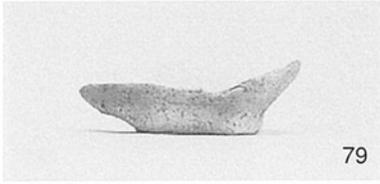
76



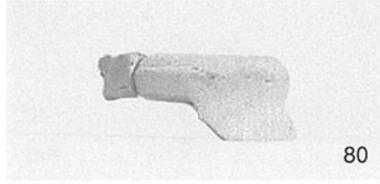
77



78



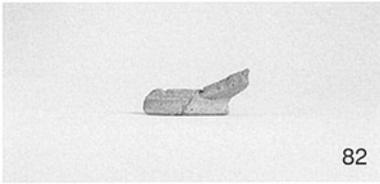
79



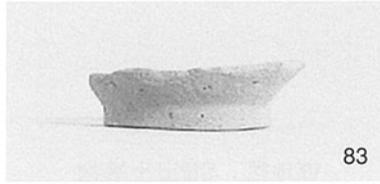
80



81



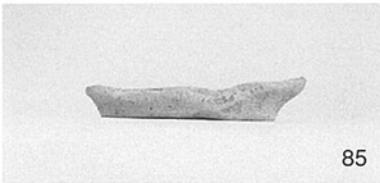
82



83



84



85



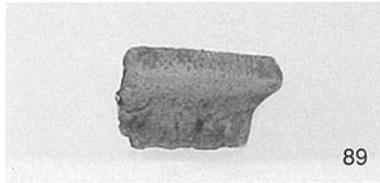
86



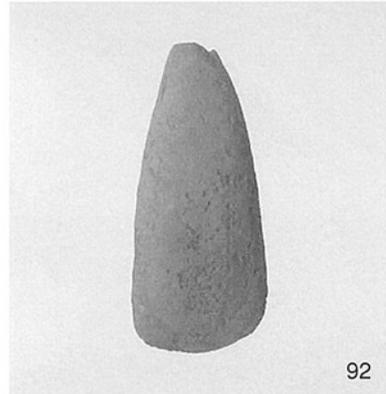
87



88



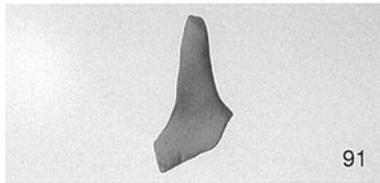
89



92

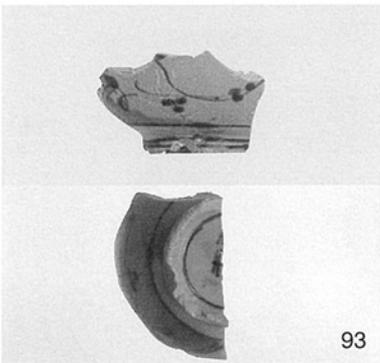


90

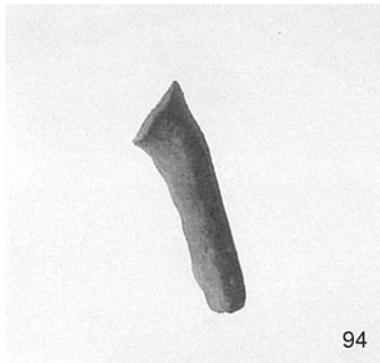


91

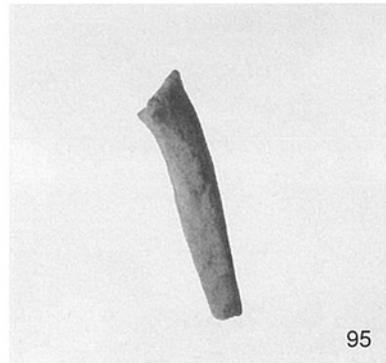
VI地区 SXI出土遺物



93



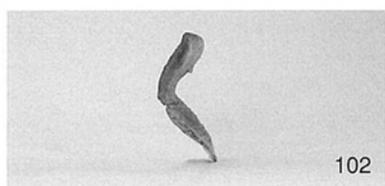
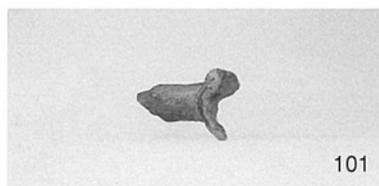
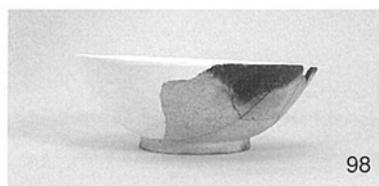
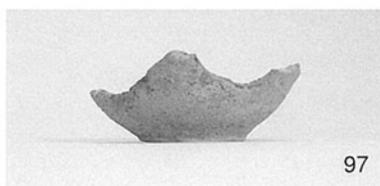
94



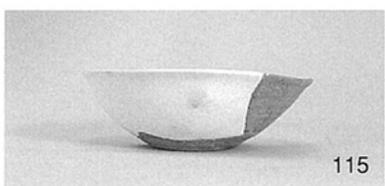
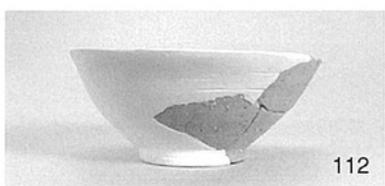
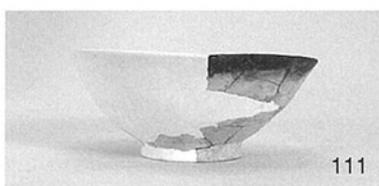
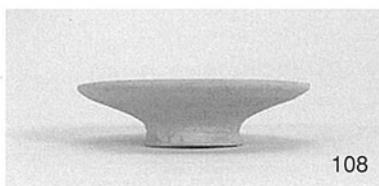
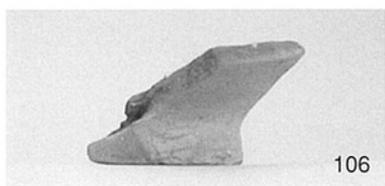
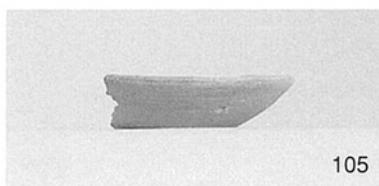
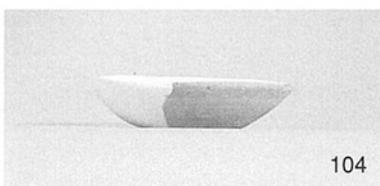
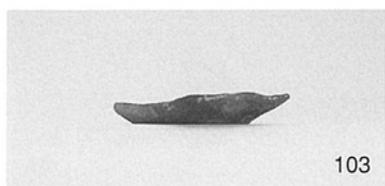
95

VI地区 表面採集

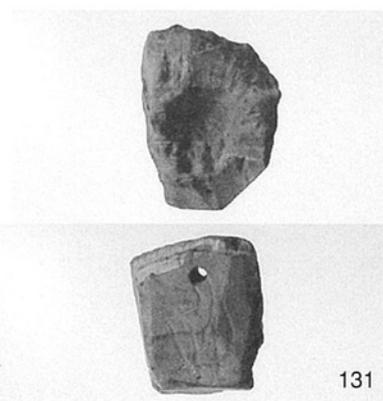
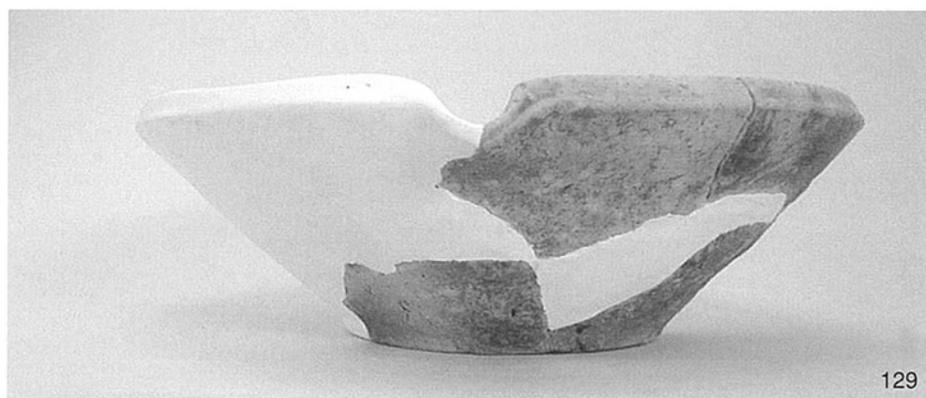
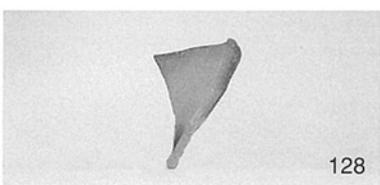
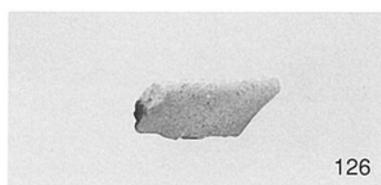
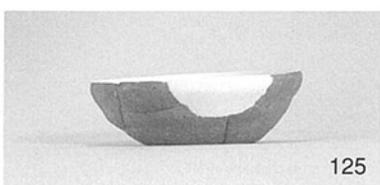
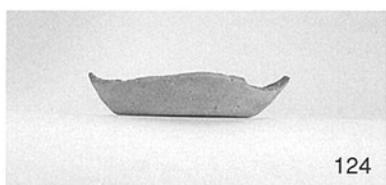
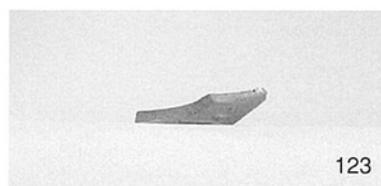
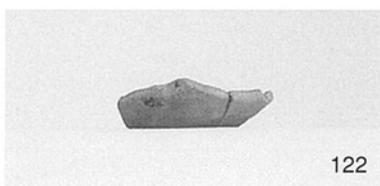
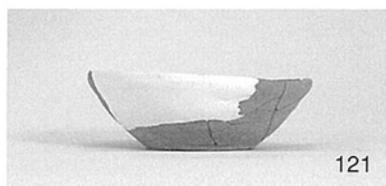
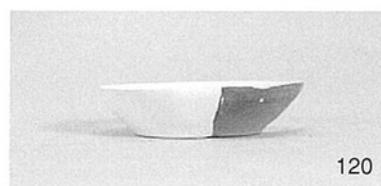
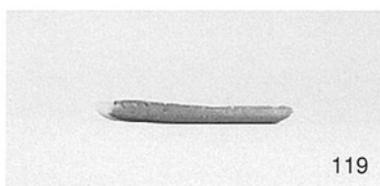
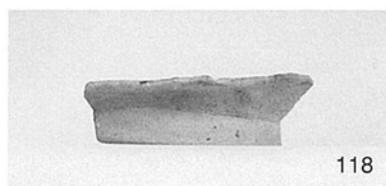
图版 6



Ⅶ地区 SB出土遺物



Ⅶ地区 SK出土遺物

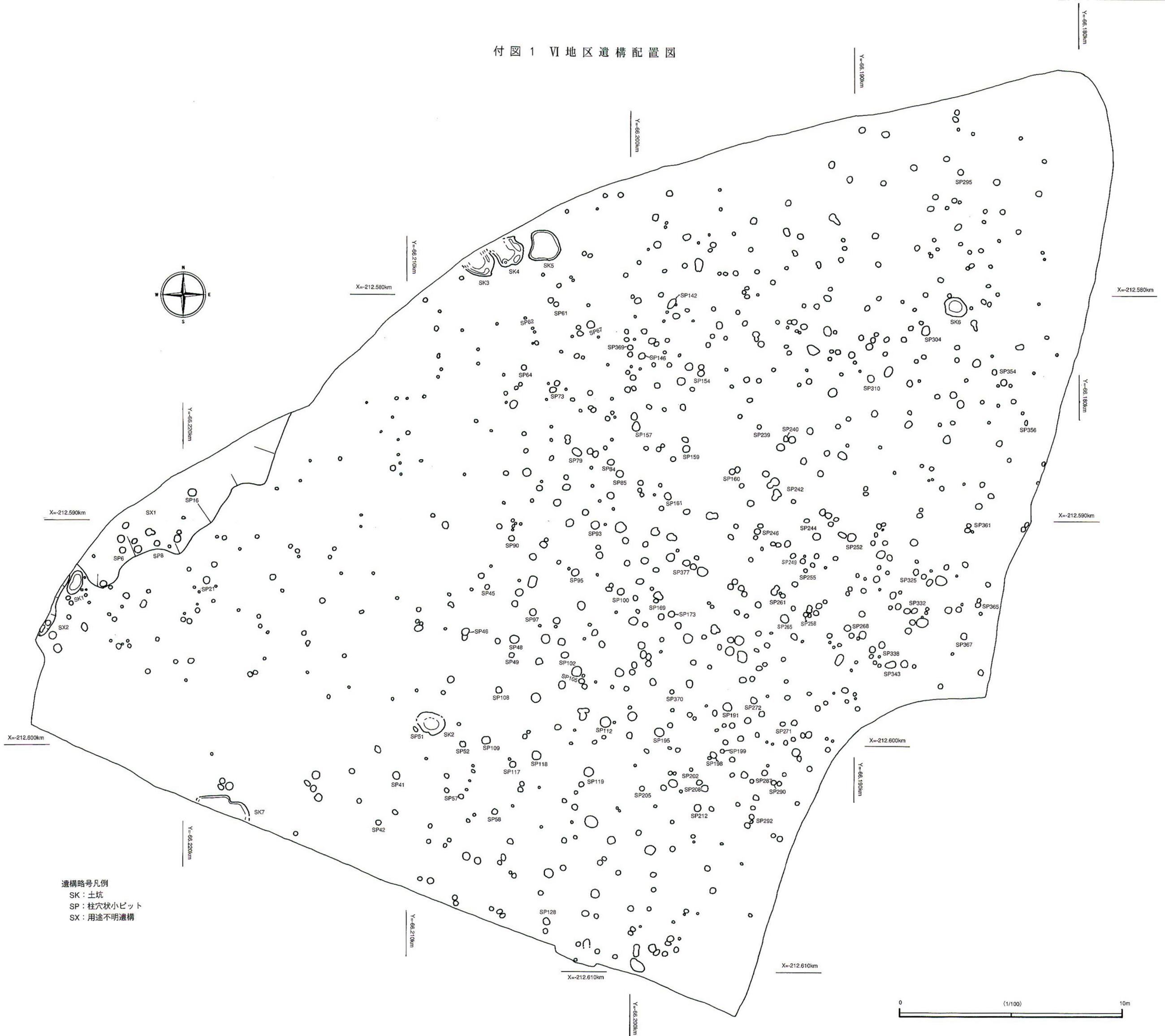


Ⅶ地区 SP出土遺物

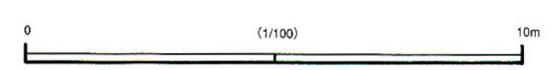
付図 1 VI地区遺構配置図

付図 2 VII地区遺構配置図

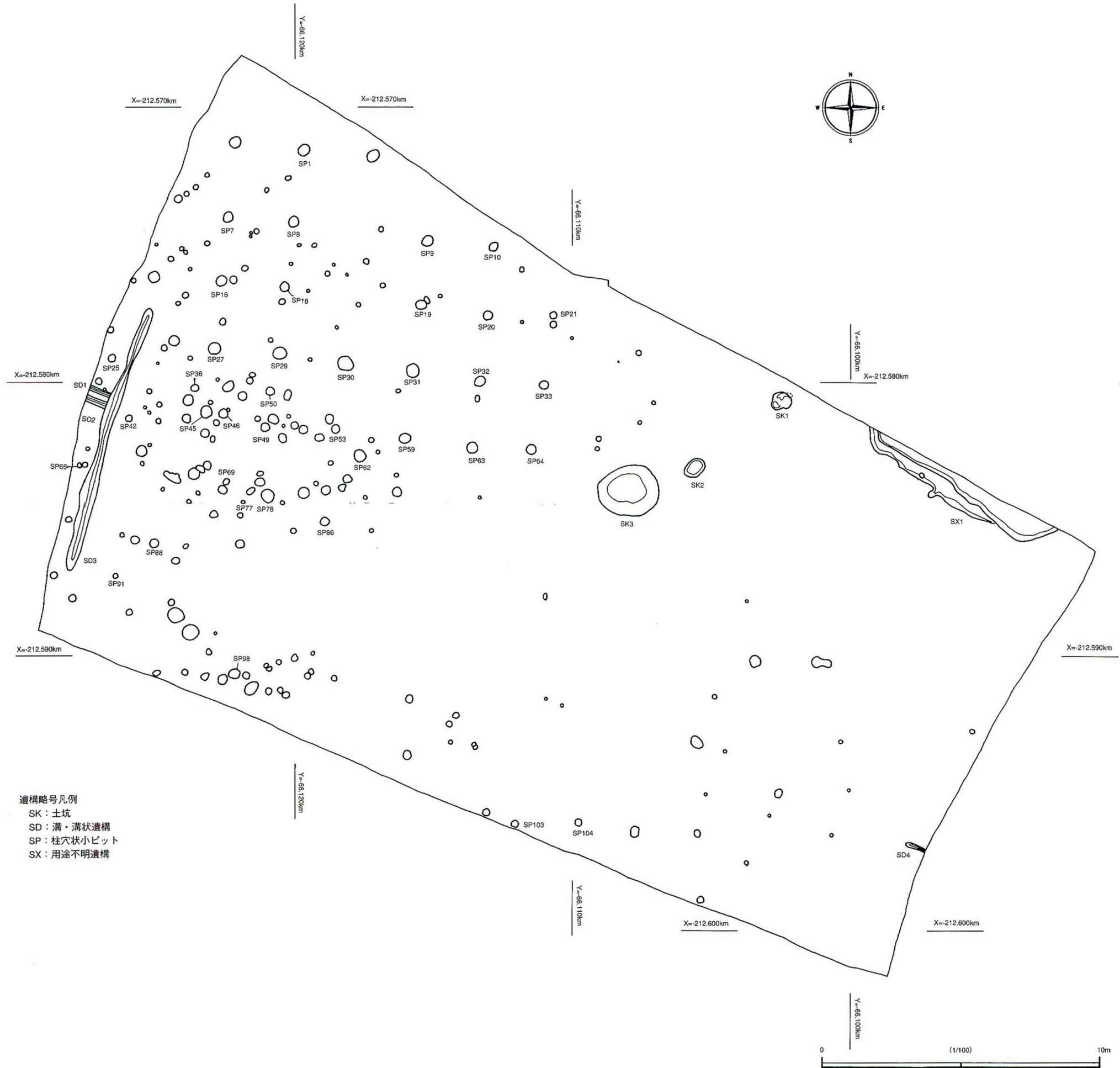
付図 1 VI地区遺構配置図



遺構略号凡例
 SK：土坑
 SP：柱穴状小ピット
 SX：用途不明遺構



付図2 VII地区遺構配置図



遺構略号凡例
 SK：土坑
 SD：溝・溝状遺構
 SP：柱穴状小ピット
 SX：用途不明遺構

報告書抄録

ふりがな	とうぜんじ・くろやまいせきIV
書名	東禅寺・黒山遺跡IV
副書名	平成10年度南若川一般河川改修・2級工事に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第13集
編著者名	大野 真司 伊藤 幸浩
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 0839-23-1060
発行年月日	西暦1999年3月25日(平成11年3月25日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうぜんじ 東禅寺・ くろやまいせき 黒山遺跡IV	やまくちけんやまくちし 山口県山口市 おおあざすぜんじ 大字鑄銭司 あざおおえん 字大円	35203		34° 4' 36"	131° 27' 4"	19980428) 19981019	2,100	南若川一般河川改修・2級工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東禅寺・黒山遺跡IV	集落跡	平安	掘立柱建物跡 20棟 土坑 10基 溝・溝状遺構 4条 柱穴状小ピット 1,170個	土師器、須恵器、黒色土器 瓦質土器、磁器、スラグ 石鏃、石斧、白色粘土塊	平安時代の集落

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第13集

東禅寺・黒山遺跡Ⅳ

—平成10年度南若川一般河川改修・2級工事に伴う発掘調査報告—

1999年3月

編集 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
(山口県山口市春日町3-22)

発行 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
(山口県山口市春日町3-22)

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
(山口県下関市長府扇町9-50)
